婦人之友

第二卷
第十號

謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。

但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。

一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。

一、原稿は、一切返附せざること。

一、封書の表には、凡て婦人と子ども投稿と明記せらるべし。

一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。

一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

發行　毎月一回九日發行○第一卷第一號明治廿四年一月二十日發行

定價　一册金拾錢○六册前金九拾七錢○拾貳册前金壹圓拾錢○郵稅各一册一錢○切手代用は壹割增但壹錢切手に限る。

入會者　は會則御承知の上にて東京女子高等師範學校附屬幼稚園內フレーベル會あて申し込まるれば雜誌は無代價にて送呈すべし

讀購者　は總べて前金にて東京日本橋區本石町三丁目二十三番地金昌堂へ御注文のこと○送金は神田今川橋又は日本橋室町郵便取扱所受取人金昌堂あてのこと○見本は切手二錢に限る○十二枚封入にて申し越されたし○前金相切れ候節は赤にて●印を御姓名の上に附し候に付き早速御送附下されたく御入用なき時は御斷り下されたく候○轉居の節は新舊共に御通知を乞ふ

編輯　に關する御照會及原稿御寄贈はすべてフレーベル會あてのこと

廣告料　一頁十圓半頁五圓

明治三十五年十月二日印刷
同　年十月五日發行

不許複製

發行兼編輯者　東京市本郷區元町二丁目六十六番地　江崎政芳
印刷者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　日下主計
印刷所　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　熊田活版所
發行所　女子高等師範學校附屬幼稚園內フレーベル會
發賣所　東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地　金昌堂

大賣捌所　東京東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第二卷第十號目次

子ども

六人の武者修行（やまとの翁）●松葵牡丹（雨情）●次郎の海遊び（愛鷗）●ぶた娘（はる子）●湯屋の大黒天（とき子）●懸賞問答當選●この次の懸賞問答

家庭

救急所置……醫學士長瀨復三郎
子供を春負ふことにつきて……雨森釧子
今昔いろは料理……石井泰次郎

學術

眼の話……本郷生

史傳

節女阿正の傳……米溪
祇園梶子の話……上野紀士

文苑

山家月……佐々木信綱外
月前雲……東くめ子
花のかげ……小林つねを

說林

本邦古代保育法の一斑……下村三四吉
現今幼稚園の保育法につきて……東基吉

寄書

幼時の家庭……萩子
同　上（一等）……友彥
同　上（二等）……不忸軒人
同　上（三等）……平野ゆき子
同　上……操女

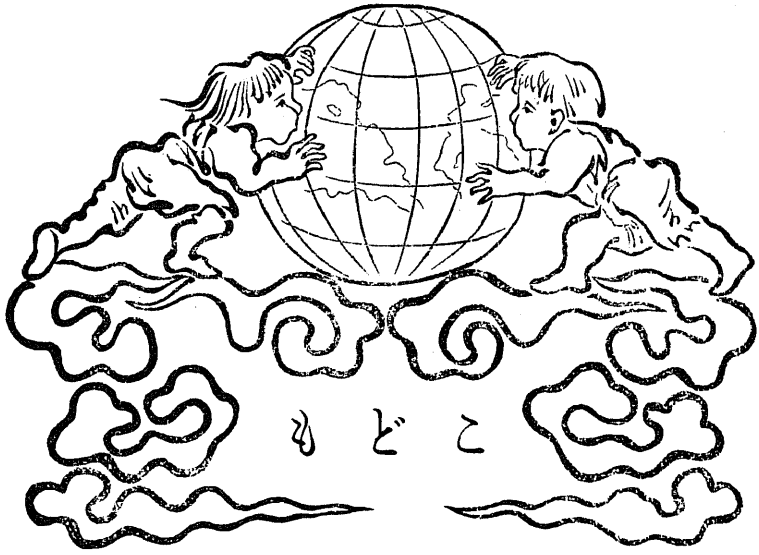
雜錄

窮兒の惡くなる有樣……ひさ子
かみなつき（十月）……せく生
牧羊閑話……牧羊
秋の林……まか生

彙報

●學びの窓●北海道通信●高知短信●新刊紹介●會報

婦人と子ども
第貳卷第十號



六人の武者修行（つゞき）

やまとの翁

いよ〳〵勝負がついたので、百里次郎が王様の前にでゝ、始の約束通り。お姫様を下さいといーました。

さー、そこで王様は困りました。自分も、たゞの平民にたつた一人のお姫様をやりたくわなし、又お姫様とても、そこから よその

人につれられて行くのわ、いやだと申すので、どーにか、此災難をのがれよーとれ考になって、とー〳〵次の様な計畧を考へ出しました。まづ、御殿の中に、一つ鐵のお座敷をこしらえた。屋根も鐵でゞきて、床も窓の格子も、すっかり鐵で造って、さて其中え立派な食卓を

用意して、れ酒だの、御馳走を澤山に并べて、さて用意がちゃんと出來上ってから、彼の六人の武者修行を、このお座敷て御馳走するからといって、よびよせました。

六人の人々わ、王様の惡企を知りませんから、れーかた、お姫様を下さるお祝いだろーなどゝ思もって、喜んでやってきました。そこで、何心なく此お座敷に這入ったのを見すまして、王様わ外から、ぴしやん

と、入口の戸に鍵をかけて仕舞って、それから、風呂番の三助にいーつけて、床の下から、どんく　火を焚かせにかゝりました。つまり六人の者を火あぶりにして仕舞をーといふ考なのです。

座敷の中でわ、六人の人々わ、食卓をとりまいて、お酒を飲んだり、御馳走をよばれたりして、面白そーに、笑ったり話をしたりして、やって居った所が、暫くすると　何だか、お座敷の中が、急に暖くなってきた樣な心地がする、けども、皆わ、不思儀とも思わないで、お酒を飲んだ故だろーなんかと、思って、別に氣にも止めないで居たのです。所が、だんくだんだんと熱くなって來て、とーとー、立っても座っても居られない

程になってきた、それもその筈、天井から窓の格子から、何から何まで火でやけて眞赤になって來た。そこで六人の人々わ、仰天した、入口の戸を開こーと思っても固く鍵がかゝって居る。

そこで、始めて知った王様の惡企、姫を吳れるのがいやさに吾々六人を焚き殺そーとゆーのか と六人の者わ 齒を食いしばって怒り出しました。所が、横っ丁笠の寒井國冬が。

『うん、そーだ、それに違なしだ。隨分惡いな。けども諸君、僕が一番、こゝで大霜を降らして、此火を消して見せる、そして王様を吃驚させてやろー』

こーいーながら、國冬わ、今まで横っ丁に 被って居た笠を

眞直に頭の上に直した所が、これわ不思儀、あんなに暑かったお座敷が急に冷くなってきて、見て居る中に、れ酒や肉までがかたく凍って仕舞って、丸で寒中の樣な有樣で、今度わ、六人とも寒くって〳〵ぶる〳〵慄えて居る。外わ眞白く霜が降つて居る。

それから二時間もたってから、もー六人とも皆、黑こげになって死んで仕舞ったゞろーと思って、戸の鍵をはづさせて、王樣が自身で、中を見に來ました。所がこれわ意外、六人とも黑こげ所か、丸で生き〳〵してお酒を飲んで居て、あんまり寒くって勘らぬから、外え出して下さいといふことである。

王樣わ、一時わ大變に吃驚しましたが、何れ揃って不思議な者

ども、とても殺すことわ、六かしーから、れ金をやって、姫を助けることにしよーと、れ考ヱ直したもんですから、直ぐ頭分の兵太郎をよびよせて、相談をしました。

王『どーだ、若し金が要るなら、欲しいだけやるから、どーか、姫を置いて行って呉れないか』

『兵かしこまりました。私の家來が一人で持てる丈けで宜しいから、夫丈下さらば、お姫様と交換致しましょー』

そこで王様も、一人で持てる丈といヱば、知れた金だ、これで助かることなら、甘いもんだと喜ばれて、早速受取りにくる日をきめて其とーり約束しました。

すると。兵太郎わ、家え歸って、大急ぎで、國中の仕立屋を

殘らずよび集めて、一月ほどかゝって、夫わ〳〵大きな一つの袋を縫わせました。さて約束の日になりますと、例の大木を根びきにした大力の金太郎が、この大袋を肩にかついで、一人でのっさ〳〵と王樣の處に出かけました。

これを見た王樣わ、驚いた、『何とゆー力の强い奴だろー、こんな大きな袋を持ってくるとわ、これでわ、どの位の金を持って行くか知れない』と一人で御心配になって居る。

それでも、しかたがないから、まづ金の塊を三百貫だけ、やっと十六人に持たしてきて、金太郎の前に置かせると、金太郎わ、それをちよいと、片一本の手で持って、ポイと袋の中へ投げ込んで『何んだ、これぱかしの金を？　袋の底の一隅に這入って

仕舞ったじやないか、さー一度に、もっとどし〳〵持て來た〳〵』

それから、王樣わさしづして、幾つもの庫から、だん〳〵と寶物を出さしてくる、持ってくる、と金太郎わ袋の中に投げ込んで仕舞う、もーよかろーと王樣の方で思うと、金太郎わ、『まだ〳〵これじや、袋の半分にも足らない』といって居る。とー〳〵お仕舞に七千輛の車に、金だの、銀だの、寶物だのを一杯積み込んで、夫を牛に引かして持ってきました。所が金太郎は夫を皆一かたまりにして、袋の中に、ねぢこんでしまいました

寶物も、牛も、車も、みんなゴッチャにしてねぢこみましたが　まだ夫でも袋一杯になりません。そこで金太郎わ、『何でも

いーから　這いるだけ持って行くのだ、見つかりしだい何でも持ってこい』といーだして、とーく澤山な庫をみんな空虛にして仕舞って、

『さーこれでよしにしよー。袋わまだ一杯にならぬけれど、これ丈の方が、

反って　しばり上げるのに都合がいー』

こーいって、大きなく袋を、ヤッコラサと肩にかついて持って行きました。すると、兵太郎も『さー、もーいーから、皆で一所に歸ろー』といって其國をたちいでました。

さーこーなると、王様の方でわ大變になった。何だって、國中の寶物を一つも、殘らず持って行かれたんですから、これわこーして居られない　すぐ追っかけて取り戻さんければ　とゆーので、命令を軍隊に下して、急いで六人を追かけさせました。

そこで、まづ一千人の兵隊が馬に乘って二手に分れて　追つかけて、後から大聲をあげて　よばりました。

『貴様たち、逃げよーとて逃がさぬ、すなをに金の袋を渡さは

よし、渡さんければ、一ヤ引捕にて、首をたゝき斬るぞ』

しまするとと、六人の一人の風尾吹彦が、立ち留って

『ハッハッハッハッ、八釜しー、逃がさぬとは、よくいーおった、それならば、まづ吹彦が、鼻息で、汝等を大空高く飛ばしてやろー』

といって、いきなり、片ヤの鼻孔をおさにて、片ヤの孔から思ひいれ鼻息を吹きだして、二手に別れてきた一千人の兵隊を物の見事に空中に吹きとばしてやったのです。すると、片一方の五百人わ、右の山の上え、半死半生になって落ってちるし、一方の五百人わ、左の方の河の中におっこちて、みんな溺れて死んでしまいました。夫から六人わ、無事に家え歸って、持っ

て來た寶物をめい〳〵に分配して、お仕舞まで仲よく暮らして行きましたとさ　めでたし〳〵

こどもが、いけのそば、へ、いって、みづのなかに、かへるが、たくさん、いるのを、みて、おもしろがって、それに、いし、を、なげつけて、ころして、いると、一ぴきの、かへるが、ひょいと みづのなかゝら、あたまを、もちあげて、

こどもさん、どーか、やめてくださいな、あなたわおもしろいでしょーが、わたしらわ、ころされているのですよ。

松葉牡丹

雨　情

ある御庭の築山の陰に毎年夏が來る度ごとに、紅い花と黄色い花とが咲く松葉牡丹の二株が植ゑられてありました。

所が丁度今年の如な雨年で土用前からシク〳〵降り續きの雨が遂々土用中降り通しで、一日のお天氣さへ見ずに暮らして仕舞つたのです。

將か殘暑になれば照るだらうと心待ちに思つて居りましたのも空頼みで、殘暑となりましても相變らず雨雲は定まりません。

で、松葉牡丹は非常に氣を揉んだのです。

『何うだい紅さん、こんなに雨ばッかり降つて居ちや……折角美麗な花を咲かうと思つて居たんだが駄目になッちまうぜ。

『お互に閉口だ、今年こそ僕なんかは今迄にない立派な花を咲いて、撫子や朝顔の奴なんかを驚かして遣らうと思つて居たんだが……あゝ殘念で堪らない。』と悄然て居ります。

『君も矢つ張り僕と同じ考へで居たのか頼もしいなー しかし君茲だぜ考へ所は。この儘にして居りやァ屹度庭掃さの爺が僕等の花の咲かないのを見付て、枯れたんぢやないか何んてミジメな目に合はせられるよ。

『それだ君、第一心配になるのは、しかし好工夫もないが、僕はかう思ふんだ、何んでも此庭の中に花の咲いてる奴を片ッ端から枯して仕舞ふさうすれば、皆な僕等と同じ有樣になッちまう。

『成るほど、それは好工夫だが何麼して花の咲いてる奴を枯らすんだい。

『なーに譯がない、根切り虫を賴むさ、根切り虫を！。

『根切り虫？。』と黃色いのは、うなづきましたが、良不安心らしい顏付きを致しまして。

『滅多に根切り虫なんかを賴もうもんなら、それこそ僕等の根を喰はれッちまうぜ。

『なーに大丈夫心配にやァならんよ、此間も根切り虫が僕ん所へ遊びに來て斯う言つてた。撫子や顏朝の奴等は無闇に丈ばかり高く成つて威張りやがるから時々根を嚙つて遣らなくてい成らないッて。

『根切り虫が本統にそんな心掛けで居るなら好いが、若し間違つたら大變な事になるぜ。

『決して心配にはならんさ、根切り虫は中々義俠心のある虫だからなァ。』と話して居ります內に、ピョコ〳〵根切り虫がやつて參りました。

『やァ根切りさんか上へ登り給へ。』と申しますと、遠慮なしにズン〳〵葉の上に登つて來ました。

『今日は是非とも根切りさんに折り入つた御願があるんだが聞いて吳れまいか。

と、紅いのがまづ申しますると、根切り虫は何時にもなく橫柄な風を致しまして。

『何んな用かは知らないが、今日は君達に掛け合ひに來たのだ。

『それは又、何んな譯で。』と黄色いのも紅いのも掛け合と言ふので屹驚致しました。

『何んな譯、こんな譯と聞かんでも君達は自身の事だから好く知つてるだらう。何に知らん、花の咲いてるのを皆な枯して呉れろと、これは飛んでも無い事を言ふ、一体お前達は此お庭に何んの爲に培はれて居るのだと思ふ？。

と、聞いて黄色いのも紅いのもこれはと眞蒼になつて慄えだしました。

『花を咲けばこそ大事にして培て置くのだ、それに花の一つも咲かずに便々して居なから。却つて他の美くしい花を嫉んで枯らして呉れろなぞとは不心得極る。何うせお前達の根を嚙らうと思つて掛け合に來たのだから、ヨシ〳〵そんな不心得なら枯れて仕舞ふまでお前達の根へ嚙り付いてやるからさう思へ。

と、言へ捨てゝ止めるのも聞かずに根切り虫は歸つて仕舞いました。

さあ後で松葉牡丹は、何うかして助かり度と、いろ〳〵工夫しましたが。

とう〳〵根切り虫の爲に枯らされて仕舞いました。

（完）

次郎の海遊び

愛鷗生

次郎といふ小學校の生徒がありました、暑中休課までは附添人に連れられて通いましたが、先生が自分の事は出來るだけ獨りでしなければ、終にはなんにも出來ない人になつてしまい、又住家の近いのに附添人に連れられて來る生徒は、弱い人

だと聞ました又たお母さまから獅の子の話又はトランスバールといふ國には、十歳で國の爲に戰爭に出たといふ勇しい噺や強い噺を聞きましたから次郎は強い人になりたいと思いまして一人で通ふことに致しました。

學校が始まつてから二三日經た一日學校から歸りまして、お友だちとさんざ遊んで日が暮ましたから寢床へ入りましたが、れ腹がごろごろとまるで遠い所の雷でゝもあるかの樣に鳴始め寢返りをすると腹の中で水が落る樣な音がして、氣味が悪くなつてきました、其は先刻あまり騷いで咽喉が渴きましたから水を飲ました爲でありました、次郎は先に先生から「水の中には悪い病氣の虫が居て沸さない水を飲むと、其虫がれ腹の中で澤山になつて暴れ回」といふことを聞て居ましたから益々心持が悪くなつてまいりましたが暫してうつうつと寢ともなしに寢ました。

さて朝起きて平日の樣に學校へ行きました、學校は海近くに建られてありまして習字の先生が臨時欠席の時は、日によると草原や砂原へ連れて行かれることがあります、丁度此日は習字の先生が欠席で濱近の草原で遊で居りました、次郎は休課中暑い日は川で游いで居りましたから大そう游が自慢で友達に慢り話の末とうとう海で游で見せることになりました先生の姿が小山に隔られて有を好機とし飛込ました、之が大變な間違でありました、常に先生から隱れてするといふことは悪いことで、昔森蘭丸は隱なかつたが爲に御褒美を頂たといふことを聞て居たのです、此時に次郎は覺て居ましたでしようか？次郎は自慢したいばかりに

海へ飛込ました、天氣はよし浪は靜だし暫時游て居ました、もうあがろうと思まして岸邊まで游着て立うと致ましたが、何うしましても立ませんばかりか沖の方へ引込まれそうです、何うしたのかと思ますと浦の子が云て居りました「いまき」という沖の方へ引て行潮の中へ這入てしまつたのでした、此は大變と思て一生懸命游ましたが手や足が疲れてもう沈でしまいそうになりました、すると後から大きな濤がよせて來まして次郎を其中へ卷込で、微い軟い砂の上へ打揚ましたが、もう其處で氣絕してしまいましたのです、他の生徒はそら海へはまつたという騷で先生の處へ走附たので、先生は驚て飛で出になりました、其時は丁度次郎が濱へ打揚られた時であつたのです、どうでしょう陰でいたづらをすると、こういふことになるのです！、次郎は宛然死だ人も同じになつてしまいました、先生は耳の側て次郎々々とお呼になつた其聲が不思儀ですね、次郎の耳へは毎朝起して下さるお母樣の嬉しいお聲でございましたそうです、次郎は氣が附て眼が覺て、海邊だと思いの外住家の例の衾の上で、枕元には上着も下着とさあお着なさいという風に待て居る、お床の上には机、机の上には本やミットが例日の通にありました、而して寢衣は汗で濕然として居りました、次郎はよく〳〵考てみると夢、實に夢で在たのです、昨日あまり水を飲過苦かつた爲に夢を見たのでありました。

洗つてはいやだ。洗つてはいやだ。

と今年七歳になる、鈴ちやんが、湯殿で泣きながら、女中を、叩いたり、蹴たりして居ます。

そんなことを仰るなら、もー豚の處へ、往ておしまひなさい。ほんとに汚な好きのお子だ。

と云つて、女中の松は、泥だらけな、鈴ちやんの兩手を、摩て居ます。

其方が好い。汚い方が好い。

と鈴ちやんは、喚いて、手拭を窓から投たり、石鹸を板の間へ、叩きつけたり、しますから、松も手のつけやうがないので、半分洗ひかけたまゝで臥床へ抱いて往て、おとなしくお寢みなさるのですよと、云ひ聞かして寢かしました。

鈴ちやんは、少時の間窓から窺き込んで居る、お月樣を見て目をパチリ〳〵させながら、

お隣の家の、豚の處へ往かう、そーすれば食べたり寢たり、芥の中へ轉げたり、する斗りで、お湯へなんか、少とも入らなくて、いゝのだから、と獨語をして、考へて居ましたがやがて密々と起きて、そーッと裏梯子を降りて、椽側から庭へ出て、木戸口から、お隣の豚小屋へ、往きました。

其中には、小さい豕が二疋藁に包て、よく眠て居ます。鈴ちやんは密り隅の方へ、入り込んで、お湯を使はせる松やも、「お前垂を、汚しては、いけませんよ」と仰る母樣も、居ないで、只豕と一所に遊んだら、如何に面白かろーと、莞爾々々して居ました。

翌朝、鈴ちやんは、お隣の伯母さんが、豕の桶へ牛乳を入れる音で、目が醒めましたが、伯母さんが、往てしまふまで、靜として居て、やがて、這

人出して、片乳を欲しいだけ飲んで、お芋の尻尾や、お冷飯を食べました。此品々は、豕にと云ッて、置いてあるのですけれども、肝心の豕は、まだ目が醒めないのです。鈴ちやんは、養べて終ふと、芥を堀て、其中で、緩りと眠ました。

こーして、晝間はかくれて、夜になると、自分の家へ行て、窓から臺所へ入り、戸棚の種々な甘い食物を、澤山持出しました、そーして寢衣のまゝで、方々歩き廻て、花の眠るのを見たり、小鳥が巣の中で、チユッ〳〵と鳴くのを聞いたり、螢や蛾の遊ぶのを眺めたりして、喜びました。誰も鈴ちやんの、こんなことをして居るのを、知ッた人はありませんから、鈴ちやんは獨りで、月光を浴びて、飛んだり跳ねたり、大層面白がッて居りました。

草臥れば、豕の處へ行て、一日寢て、只乳や食物を、人が持てくると、其を食べに起きるばかりです。一体此豕を、飼て居る伯母さんは、大層豕を大切にするので、清潔な藁を、度々入れたり、食物なども、出來るだけよくしてやります。

鈴ちやんが、長い間、こんな變な生活をして居ます内に、段々人間の子といふよりは、豕の方に近くなてて來ました。寢衣は汚れましたし、髪と云ッたら、櫛を通した、こともなし、顔は洗ったことなし、泥を掘るので、手は豕の足のよーになッて、しまひました。夫でもー、お話もしないで、豕のよーに唸りますし、食物で豕と喧嘩したり、何か食べるにも、鼻ごと桶の中へ、突込んで食べます。

初の中は、夜になると、遊びに出て、食物を盗で

歩きました。其時分盗まれた人々は、盗人を捕へると云つて、庭に罠を仕掛けるやら、鈴ちやんの家の、料理番も、近頃鼠が、臺所から、れ菓子や豆を持ち出して、いけないと、ブツ〳〵云つて居ました。處が、其中に鈴ちやんは、余り肥つたので、大儀で眠るのと食べるの外は、何をするのも、いやになりましたから、少も小屋から、出ませんでした。そーして、四這ひに歩きますから今は尾の生えないのが、不思議な位でした。

夏中は、豕と遊んで、面白いとも、思ひましたが秋が來て、漸々寒くなりますと、サア暖なフラネルの着物が、戀しくなるし、冷い食物がいやになるし、火鉢へあたりたく、暖なお汁が、食べたくなりました。けれども、今更家へ歸るのは、きまりが悪いので、どーしたらよかろーと、困てしまひました。そこで豕に「お前は冬はどーするの」と尋ねましても、只唸るばかりです。そーして、毎年冬になると、此小屋は空になるのですから、豕は、どーなつてしまふのだろーと、其處が一向鈴ちやんには、分りませんでした。

或晩恐しいことが、起りました。其は鈴ちやんが、暖まろーと思つて、肥た豕の間へ潜り込んで、まだ指の先が冷いので、切りに藁を、ゴソ〳〵引張て、居ました處が、隣の伯母さんが、息子に、こー云つて居るのが、聞えました。

明日は、豕を殺そーヨ。ずいぶんよく肥つたから。それだから、今夜中に、庖丁をよく研いで置て、おくれ。

アヽマア私はどーなるのだろーと、鈴ちやんは、砥石が、ゴシ〳〵擦られる音を、聞きながら考へ

ました。

私はすつかり豕のよーだから、必一所に殺されてしまふ。今逃げ出さなければ、鹽漬にされてしまふ。もー豕ゴッコは、いやになつた、樽の中へ、詰められるよりは、一日に、百遍も、お湯へ入れられる方が、まだまシだ。

鈴ちやんは、こんなことを、考へながら、朝まで戰へて、臥て居ましたが、夜が明けると直に、庭から家へ、走つて行きましたら、丁度裏口があいて居ました。そーして、下女は火を焚かうとして、薪を物置へ取りに行つて、居ましたので、鈴ちやんは、コソ〳〵梯子を上つて、お部屋へ行きました、直ぐ臥床へ入ろーと、思つて、ちよいと鏡を見ましたら、鏡の中に、襤褸と芥に包まれて、毛は蓬々として、泥だらけな丸つこい鼻のある、眞黑な動物が、居ました。

あれが私かしらん、何て汚ならしいのだろー。と、鈴ちやんが云ひまして、どーも眞白な寢床を、汚したくないと、思つたものですから、行水盥の中へ、飛びこんで、一生懸命に、体中を洗ひました。夫から清潔な寢衣に、着かへて、髪を抓て、長い爪を剪りましたら、元の美麗な、お孃さんになりました。そこで、友禪染の可愛らしい、夜具の中へ入て、横になつて、清潔な上敷や、柔な毛布や、自分の小さな枕を、再び使ふのを、大層喜んでよく眠てしまひました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

サア良い子だね、お起き。新しい着物と、好いお前垂があるよ、母様が拵へて上げたのだからご覽、今日は、お祭で、花ちやんも、照ちやん

も、皆お呼ばれに來るよ。

とお母樣が、柔しく仰いました。鈴ちやんは、いきなり飛び上つて、大きな聲で、

殺してはいけない、どうか殺さないで、私家ではない、子供だ、子供だ、家へ歸して下されば、洗ふ時に、もう必怒らない。

と叫びました。

どーおしだへ、何を恐がるの？、

と、お母樣は、鈴ちやんの樣子を、見て、笑ひながら、仰いました。

鈴ちやんは、今まで不思議な生活をしたことを、殘らず母樣に、お話をしましたが、

其は夢だよ、お前は何處へも行きはしなかつたよ。昨夜松やを、ひどい目に逢せてから、茲でよく眠て居たもの。

と、お母さんの仰るので、又驚きました。

ア、夢々い、夢！私之から、清潔にすること、好になろーや、松や、石鹼持ておいで、そーしてお前の好いだけ、こすつておくれ。もー少とも、打つたり泣いたりしないから。

鈴ちやんは、無事に樂しい家に、居たのを喜んで、

決して汚い怠けた、ぶた娘ではないといふので、跳り廻つて、右のよーに、云ひましたトサ。

湯屋の大黒天

三河境川源　近藤とき子

或る處にそれは〳〵極正直で人の應待の好い湯屋がありまして、毎夜大賑やいであります。其の隣に又性質の至つて好くない醫者がありました。診察が下手な上に藥價が吃驚する程高いのですから、誰れも診て貰ひに行くものはありません。或晩の事、この醫者が、お隣りの湯屋へ行きました所が、餘りに賑ぎやうので、どうにも妬く思つて湯を使つて居ると、不圖向ふの柱に大黒天が祭つてありました。そこでお醫者は、『やあ、當家の繁昌するのは別ではない、彼の大黒天があるからである』と想ひましたので、急に夫が慾しくなつてそーつと盗んで家に歸り、神棚へ上げて祭りました。所が其の夜一時過ぎになると、『お願ひますお賴みます』と戸を敲きますから、奥さんが起きて、戸を開けますと、血氣な男二人り這りまして『隣村の者でありますが、昨夜から父親病氣に罹られまして今の樣子では、明朝までの生命が覺束ない樣に思はれますから、一度お診察が願ひたいと思つて參りました、誠に夜更で濟みませんが、どーぞ、今から私等と一所にお同道お診察してくたさい』と賴みますと、醫者は直樣起き上つて『ハイ宜しい』、〳〵身仕度をなし、男に連れられて往きました、道すがら是も大黒樣のお蔭で、錢儲けの端緒が出來たのだわいと思つて山路へ行き掛りました。すると、前の男俄かに懷劍をすらり〳〵拔

き放ち、父親の急病とはそは大な詐り、着衣を渡さばよし、否と云へば此の劔の錆にする』と嚇し付けられたので、醫者は、さー大變と思つてすぐ眞裸体になり、命から〳〵一目散に吾家へ戻つてきて、いきなり前に祭つてあつた大黒天を庭に投げ出して、よくも已を眞裸にしたな、さー覺にて居れと、金鎚で散々なぐりつけました、すると大黒天は大に叫んで『コレ醫者待て、其方は全体何んと心得る已は湯屋の大黒樣だからして、人を裸にするのが、商賣でないか』と申しましたとさ。

◉第八號懸賞問答當撰

問題

(一)起きて居るものを寢こ(猫)とはこれ如何

(二)虛言をつくことを法螺を吹くとはこれ如何

(三)一疋の獸をう、さぎ(兎)とはこれ如何

(四)見て酌みながらみずくむ(水汲)むとはこれ如何

◉一等　姫路市五郎右衛門邸　大竹さく子

(一)生きて居るものを死々(獅子)といふが如し

(二)恪氣することをやきもちを燒くといふが如し

(三)一疋の虫を鎌錐(螳螂)といふが如し

(四)有るものを食ひながら無し(梨)を食ふといふが如し。

◉二等　埼玉縣川越女子學院　山田　穰

(一)側に居てもいぬ(犬)といふが如し

(二)諂諛者をたいこもち(幇間)といふが如し

(三)一疋の獸をかもしか(羚羊)といふが如し

(四)水氣多きをみづなし(水梨)といふが如し

◉三等　神田區雉子町三十一番地宮本方　林　かね子

(一)來るものを去る(猿)といふが如し

(二)虎の鳴くのを嘯くといふが如し
(三)一人の愚者を馬鹿といふが如し
(四)床に懸けながらかけず(懸圖)といふが如し

◉右賞品

◉一等　(武島又次郎作歌 小山作之助作曲)　東京唱歌　全二冊
◉二等　(中野虎三作歌 東久め子作曲)　瓜生岩子　全一冊
◉三等　(櫻井信彰作曲 月庭優作歌)　赤穗義士　全一冊

其他の答で面白かつたのを擧げて見ると

(一)木に止まつて居るに飛び(鳶)居るといふが如し　松本たね子
(一)卸店でも小賣(氷)店といふが如し　谷米子
(一)寢て居てもねずみ(鼠)といふが如し　田村とみ子
　　青柳翠

(四)出る話をでんわ(電話)といふが如し　堀田丈夫
(四)手に持ちて遣るを蹈み(文)遣るといふが如し　松本たね子

◉第九號懸賞問答當撰

問題

(一)山が多いのに山なし(梨)縣とはこれ如何
(二)外にありてもうちわ(團扇)とはこれ如何
(三)田の東にあつても田にし(田螺)とはこれ如何
(四)さゝない魚をさしみとはこれ如何

◉一等　東京市京橋區鈴木町四番地　興津らく子

(一)陸續きであつてもしま(志摩)の國といふが如し
(二)外で相談してもうち合せといふが如し
(三)何分へ花見に行つてもみなみに行くといふ如し

(四)雨天の日に燒いてもてりやきといふが如し

◉二　等　福井縣大野郡平泉寺村大渡　前田省一

(一)阪が少くてもふは阪市といふが如し

(二)内に居てもた商(足袋商)といふが如し

(三)腐つた物が北に在りてもきたないといふが如し

(四)眞直に据えてもさか樽(酒樽)といふが如し

◉右賞品

◉一等　(小山作之功作曲)(中村秋香作歌)　菅公の歌　全一冊

◉二等　(東くめ子作曲)(中野虎三作歌)　瓜生岩子　全一冊

◉やまとの翁申す

第八號のには澤山な應募者があつたのに、第九號のはまことに少くて、三等のに價するのが殘念ながら見當りませんでしたから、仕方がない二等までにしましたから、無理いはないで承知して下さい。夫から第八號の賞品は、ずつと早く出す筈じやつたのが、翁が八月の末から九月へかけて、行脚に出かけたもんじやから、賞品の發送をば留主居の若者に賴んで置きましたじや、所が歸つてから、送つたかと聞くと、忙しくつて忘れたといふ、いやはや若い者は頓と之じやで困る。そこで翁が此年になつて、諸孃諸君へ御詫をせねばあらぬ。とかく命長ければ耻多しじやて。

◉六を二分して我國名一つ。　答　肥後(一五)

解答者　香川縣　高畑　稜子

◉この次の考物

出題者　福井縣　前田省一君

私は小學生徒の身分に候ふ故、賞品などはさても差上ぐる事は出來申さず候へども、此頃考へ出したる問題提出いたし候ふ。御登載の上答案募集の手續なし下され候はゞ、望外の仕合に御座候

(1)一つの役所をしやくしよー(市役所)とはこれ如

何。

(2)香ひも無いのにくさいばん所(區裁判所)とはこれ如何。

(3)はんにん官(判任官)でも一人前の俸給を取るはこれ如何。

(4)下ノ關(席)の人でも上席の官吏を務むるものあるはこれ如何。

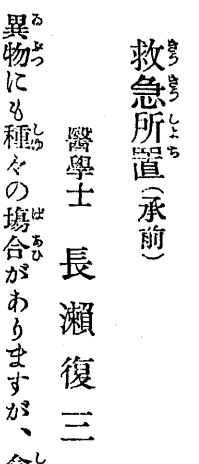
この問題中々面白いによつて、又やまとの翁から賞品を出す事にしよう。左の規定によつて。

●〆切。本月十五日までに到着すべきこと

●解答。封書に限る。用紙半紙。封紙には婦人と子ども投稿と記すること

●女子高等師範學校附屬幼稚園フレベル會あて

●披露は第十號本誌上



救急所置(承前)

醫學士　長瀨復三郎

●異物　異物にも種々の場合がありますが、食道及氣管の異物は小兒には屢々あることでございます。即ち小兒は誤つて銅貨、針、釘、ピン、魚骨片、玩弄品、鉛筆ケヅリ、等を嚥下することがあります。此等の者は若し幸に喉頭部に嵌止しますれば、容易に吐き出さす事が出來ますが不幸にして尚進んで、食道に入り、或は氣管に入ることが

あります。氣管の方に入つた場合には呼吸が困難になつて痛を起します。斯樣な場合には非常に狼狽して異物を取り出さん爲に手指又は箸などを咽に入れて却て異物を奥に押し入れることがありますから大に氣を附けなければなりません。幸に異物が喉頭部に嵌止しました時には小兒を逆につり下げて、背の眞中を打てば多くは吐き出すことが出來ます。しかし若しも氣管の中に入つた時は切開を要する場合があります。又異物が食道の方に入つた時は大抵のものは害なく胃部まで達して排泄せられますが不幸にして腸壁を傷けて腹膜炎などを起すことがあります。凡そ異物か食道に入つた時は麵包、ジャガイモ、サツマイモを多量に食して此等の不消化分が其異物をくるんで排泄する樣にすれば腸壁を傷くる恐れがありません。

子供はまた豆粒の樣なものを鼻の中に入れることがあります。此の時は能く一方の鼻の粘膜を刺激して其方を押へて嚏をさせ其勢で異物を出します、又針金の曲がりたるもの、紙よりを異物の後にいれて取り出すを得る場合もあります。異物は其物の性質によつては鼻加答兒を起すことがあります、が生命に關ることはありません。又異物が耳の中に入ることがあります。これも非常な害はありませんか異物の刺激のために化膿して外耳炎を起し、次に鼓膜を冒して中耳炎を起すことがあります、此時はカンザシなどで取り出さんとして却て奥に入れることがありますからスポイトに微温湯を入れて耳の壁に向て注射する時は耳の中で波動が起つて、其のために流し出すことが出來る場合があります、又虫の入つた時はリスリン、

オレープ油を耳の中に入れますと、虫は其油におそれて、飛び出つることがあります。又虫或は異物の入つた場合に簡單にこれを出す法は紙よりの先に硬き膏藥をつけこれを火にあぶつて温めて軟したるものを直に耳の中に入れますと冷めるに從て異物と膏藥とが附着しますから、少時の後に紙ヨリを耳から出すのであります。

又異物が眼中に入ることは度々あります例へは瀘車中で石炭の粉が眼の中に入り、また風の甚しい日に沙が入る等は普通でございます。其他小な虫が入ることもあります。此時には決して無暗に擦つてはなりません。眼を擦すれば擦する程眼瞼を傷け、遂には角膜を傷けます。靜に箸の樣なもので上眼瞼を押へて他の手を以て眼瞼を引かへし指又は布に水をつけ、これにて取り去るべきでございます。決して摩擦して粘膜を傷けてはなりません。

毒虫に刺されたる時、ハブ、マムシ、に咬まれ狂犬にかまれ、蜂に刺さるゝことがあります。此のハブ、マムシ、などは齒に毒を有つて居て其毒を人の體に注射するのでありますが、その時は速に手當をしなければ其毒は直に全體に及びます。即ち其咬まれた部分は膨れて發熱します。故にこの時は口を以て傷口を吸つて血と共に毒を吸ひ出すことが大切であります。此の法は一寸危險の樣でありますが其毒は血の中に入れは非常に害になりますが、胃の中では其毒力を遲くすることは出來ませんから、決して危險ではありません。而して其毒を吸ひ取つた跡は水、硼酸水、氷等で冷すのであります。指先などを咬まれた場合に指根

を固く、しばつて血行を止めるとがありますがこれは其部分が壞死することがありますから、注意して醫師の敎に從ふのです。又毒虫例へは蜂、虻、毛虫、イラ虫などにさゝれた時はアンモニヤ水を塗るのが尤も宜しうございます。ハブ草なども存外毒虫に功があります。アンモニア水を塗つた後はホーサン水で冷すのであります、狂犬に咬まれたる時は直に傷口を洗ひて血をしぼり出して繃帶をなし、直に醫の診察を受くべきでございます。

（つゞく）

子供を背負ふことにつきて

雨森釧子

子供が生れました時は身体の諸機關か整はないものでありますから、目はありましても見えません、耳がありながら聞えません、勿論手足の働きも自身にては十分自由に出來ません。只泣き呼び手足を動かし乳汁を吸ふばかりで御座いますから、總べて大人がよく衛生を考へて世話をしなければなりません。

赤兒と云ふものは、一日の中に眠りて居ります時間が長いものですから、大抵寢床に臥させますが、目を醒した時には、床の中に許りおきますも可愛想で御座いますから、時々は抱き上けてやります、始は斯ういふ樣に、寢かすか抱くかの二つで御座まずけれども、日數か段々たちますと、子供の身体の諸機關か發育して參りまして、前に見えなかつた目か見え、聞えなかつた耳も聞えて參りますし、骨組もしつかりして參ります、そうなりますと知惠の方も進んで參りまして、自分の苦

痛を訴ふることが出來る樣になりて參ります。睡眠時間は漸次短くなりまして、只一人寢床の中にのみ居ることが出來なくなつて參りますから、種々の事情の爲め子守に托すか下女或は母親か背負ふといふ事を致します。

其背負ふと申します事は今申した通り、子供の身体の諸機關がいくらか發達致しました後で御座いますと、左程の害は御座いますまいと思ひますけれとも、注意を致しませぬと不具となし又は虚弱なる身体となす事があります、それは如何なることかと申しますと、極少さい時には裸襁にて足を包みます、そして足を伸ばして其上に帶をかけておぶひます、足を卷かれたる上に帶にてしばられますから、足の發育を妨けます、又所によりては裸襁を當てたる儘足を開かしめ、背負ふ所もありますす、それが爲めに全く足か曲りまして、實に見惡き形となりますす、是れ等は全く生れつきてもない不具に致したので御座います。

今一は寒い國に參りますと、大人の肌に直に子供を負ふ所があります。是は大人の身体より常に發散する所の蒸發氣を受けまして、衛生上宜しくないと思ひます、抱き寐の害といふ事を申しますが、矢張是等もそれと同樣の事と思ひます。

右に申しました許りではなく、すべて子供を脊負ふと申すことは、脊負はるゝ子供も腹部を壓し、手足の自由を妨げられて、發育の害となる許ではなく、脊負ふ人も自然自身を前方に屈しますから、勢ひ身体の爲に宜しくはないと思ひます。殊に未だ赤兒の頸もすわらぬものを脊負ふは最危嶮であると思ひます。

或日或町を通りましたに、二十歳位の若き母親らしき人日數のまだ二十日にも足らぬかと思はるゝ、赤兒を、帶のみで脊負ひましたが、其子供はねむつて居りました、夫故に母親がかゝめは、赤兒の頸は前に出で、母親が仰けば赤兒はまた仰きて後の方に向く、實に赤兒の苦はいかばかりなりしならんと思つて居る內、とうゞ泣き出しましたので、母はしきりに泣きを靜め樣として、其子をゆすぶつて居るのを見ました。慥に其子は負はれたる爲めに苦痛を感じて眠ることが出來なかつたでありませう。却て床中に眠らせました方が、母親も子供も苦みがなかつたであつたらうと思ひます。

此脊負ふと申す事は日本許りではなく、外國にもある樣で御座いますか、つまり衛生上からよくゝ考へなければならない事と思ひます。殊に日本人は身体が小さいとか、足が短いとか申しますのも、全く小さい時に脊負ふといふ事も夫等の源因になつて居る事と思ひますから、子供を持たれた方は一層氣を付けなければなりません。

今昔 いろは料理

（5）

梅調のこしらへ方　石井泰次郎

薯類を、山葵おろし金にてすりおろして、梅干をたねを取去りて、肉のみを、馬尾篩にて裏でし、て、いもと一所に擂盆へ入れて、よくすり合せて、鯛の身をおろして、切て擂盆にてすりたる、すり身を合せて、よくすりて加減をなして、醬油、だしを入れ、みりん煮切をも入れて、味をつけ、金

杓子にてすくひて、煮たちたる湯の鍋の中へいれて、浮上るを度として、器に入れて出すべし。

うけ玉子の拵方

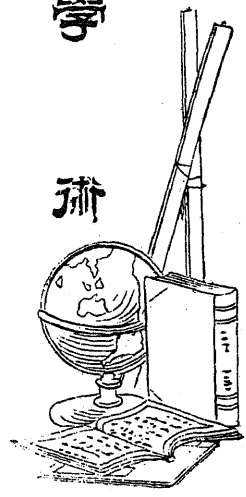
雞卵のあたらしきを、一つづゝ、黄身のちらぬやうに、銅杓子へわり入れて、杓子を持ながら、鍋の煮たちたる湯の上に杓子をうかして、上かはのかはくを見て、湯の中へ入れて杓子ともに煮て、取上て竹べらにて、めぐりよりへがして、椀のたねなどに、茶碗にもつかふべし、支那料理の金錢鴿蛋といふものもこの事なり。

右衛門五郎の拵方

これはふるき料理として賤しき方につかはれしものなり、今の料理書にこれを記すを見る、寛永年間の俗用料理に、菜を長くも、短くもきりて、ひらかつをとて、かつぶしを平にくきたるを入れ、汁に仕立たるをいへり、かゝる名はみづから拵ふる人のなにゝもつけてめづらしき名を世につたふべきなり。

Wer das Kleine nicht ach't; dem wird's Grosze nicht gebracht.

小さい事に氣を付けない人には大きな事は出て來ない。



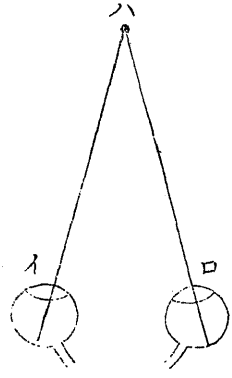
眼の話（其四）

本郷生

吾等は少時親しき友どちの集合等に於て、屢次の如き遊びをなしたることがあります。即ち紙捻二本を作り甲は其一本を以て徑一寸計の小環をつくり、乙は他の一本を曲げて鈎となし、片手を以て一眼を塞ぎ他の手を以て鈎を持ち、之を甲が差し出しつゝある環中に入るゝ遊びであります。片眼を以ては遠近の距離の判定が至て不十分である

と見に、容易に鈎が環に入りません、一度は餘りに遠きに失したるかと思へば、次ぎには餘りに近きに過ぐる樣なことがありまして　初めてならば隨分面白いのであります。

之は何故でありますか。更に問題を廣くして一体吾人が眼によりて遠近を判定することの出來るのは、何によるのでありませうかと云ふに之には種々の原因がありますが今其内の主なるものを申しますれば第一は



（上圖角イロハ）

兩眼の方向がなす角度の大小でありますが近くにあるものゝ距離の判定、は主として之に由

るのであります。讀者は上圖を視て一考することによりて遠きものを見るときは此角が小さくなり、近きものを見るときは此角が大きくなることを知らるゝであろうと思ふ。人は幼時より長き經驗によりて此事即ち距離と此角度との關係を知りますから、遂には角の大小を以て距離を判定することが出來るやうになるのであります。然るに片眼にすれば此角が出來ない、從て其大小を知るに由がない、從て距離が不慥になるのであります。之も其一例ですが、嘗て吾家の近隣に一眼の老翁がありました、此人は田舍の農夫でしたが長き煙管を口にしながら火箸に火を挾みて之で煙草に火をつけることを屢やりました、然に常に其距離を誤認して或時は遠きに過ぎ、又或時は近きに失し、之を傍觀する吾輩をして屢失笑を禁じ得なからしめたのであります。

第二には眼と其物との間に他の物の見ゆる多少であります。間に種々澤山のものが見ゆるときは遠く見ゆ、さなきときは近く見ます。誰か大海の邊に立て相對して見ゆる島の見たよりも遠きに驚かざるものあらんやです。長き竿を地上に横へたるときは之れを立てゝ下より仰き見た時よりも一層長く感ずるも又此一例であります。本年花の咲く頃、吾輩は修學旅行の途次生徒と共に嵐山に行いた、時刻ははや正午を過ぎ頗る空腹を訴へ、足も亦頗る疲れて來たが腰にある行厨は之れを嵐山の麓にて開くつもりであつたから、忍耐して進み行つた。其時眼界の廣い田野の間に於て嵐山を望見し、目的地ははや遠からずと喜んだ、後或る村に入りて垣や塀や籔や木の間より再び之を望みた

るときに、却て前よりも大に遠く見えたので失望した生徒も余程ありました。讀者も少しく注意せられたならかゝる例は屢實驗せらるゝであろうと思ひます。

第三は大さの知れたるものが實際に見る大さに由るのであります。同じ大さのものも遠くあれば小く、近くあれば大きく見えます、停車場等に於て滊車が發車するを見ましても距離の遠くなるにつれて漸々に小くなることは何人も知るところであります。之等の經驗を度々重ねたる吾等は大さの知れたるもの、例へば人間車馬等が小く見ゆる度合によりて其地其物の如何程の距離にあるやを知ることが出來るやうになる、實際河の景色等を畫くにしても對岸にある舟や家や人なぞを、愈々小く畫けは其河の幅が愈々增して見えますことは

讀者のよく知らるゝところであります。

それから其他にも空氣の層とか眼の筋肉の感じとかと云ふものがありますが、此等は委く述る暇がありませんから略しまして、茲に一つ附け加へたきことは前に述べし如く、大さの知れたるものによりて距離を測定するかはりに、吾人は距離を知りて大さを判定することも致しますと云ふことであります。これこれの距離にありて、かく迄の大さに見ゆる故に彼の物は余程大きなものなりなど云ふ話は吾輩の屢聞くところであります。日出の大陽は日中の大陽よりも大きく見ゆると云ふも、つまり此考より來る誤りで、日出の際には大陽と吾人の眼との間に原野とか山とか藪とか森とか種々のものがあるによりて、自然距離が遠く思はるゝ、其遠く思ひつゝある眼を以て大陽を見る

のでありますから實際全じ大さの像を網膜上に得ても、其が大さく思はるゝのであります、讀者は晴れ渡りたる夏の夕暮、親しき友垣と共に螢の飛びかふを眺めらるゝ折なぞに、試みに大空に輝ける任意の二つの星を定めて其間の距離幾何位に見ゆるやを諸共にあてゝ御覽なさい、或人は二尺位といひ或る人は一間位と云ひ、又或人は五間位に見ゆると言て、其歸結の甚區々なるを認めなさるでありませう。之れも各人の頭の中にある地球と星との距離の考へが（勿論漠然たるものですが）樣々なるがため起ることで、又以て距離の考が目に見ゆる物の大さを知るに關係する所以を知るに足ります（完）

史傳

節女阿正の傳

米溪

雪深うして梅蕾春に先だつを知り、時艱みて大節自から顯はる。和平文化の今に際して、此の凜列の節義を說く、春風和煦の日に嚴霜を見るの感なきに非ざるべきも、世路の崎嶇決して今昔の差あるにあらず。まして人情の薄きこと、吉野紙の其より甚からんとするに當りては、又他山の石たらすんばあらざるなり。山陽嘗て筑の游あり、節女の事を聞て之を傳す。窓前の竹影風に搖らめく

所、之を繙て感なき能はず、因て紹介することゝしぬ。

節女名は阿正、其の父は七兵衛と云ひて筑前博多の人なり。世々農を業とし、傍ら酒を釀して生業とし、資産頗る豊かなりしが、世道兎角缺け易く二妻各一女を殘して先つ歿りぬ。阿正は其の後妻の出づ。七兵衛も寄る年波に、五十の時家を其の外甥七左衛門に讓り、別に近傍に舍を營みて其の老を養ひしが、天命期あり、衰老病漸く篤きに及び、親戚誰彼を枕邊に聚め、後事を囑して曰く、吾れに男子なく、今、命旦夕に迫る、心に掛るは彼の二女なり。公等を累はさんとするは之、願くは我か死後に於て、正女の叔父嘉右衛門を養ひて長女を妻はし、正は長するを待て、長二郎に妻はして、宗家の緒を承かしめんと、長二郎は七左衛門の子たり。

斯くて、無常の風は時を撰はず、幾程もなく七兵衛歿せしかば、親族相計り、竟に其の遺言の如とく、長女を以て嘉右衛門に配し、改めて阿正を子育せしめぬ、阿正天資温良にして、嘉右衛門夫妻に事ふること至らざるなし。然れとも嘉右衛門元來無賴の性とて、少しも心を家事に用ひず、日に酒に親みて、同氣の友、村の獸醫萬助と與に沈湎樂みとなし、義文より受けし田業は概ね、典して幾んと盡くるに至りしかば、親族交々之を規すれとも、少も耳を傾けざるなり。

斯くて過き行く年月に、阿正も既に成長するに、天成の才容共に備はり、楚々たる風姿人を動かす。長二郎亦弱冠に至りしが、質直にして勤格なれは、村の人々皆信じ愛しぬるに、浮世の風は儘な

らず、不幸にして連りに災患に遇ひ、資產稍前々の如くならざるに至りしかば、婚儀の談も因循に過ぎて、未た成に至らざりき。

赤間の隣邑に勝浦村と云へるあり、其の村長は半五郎と云ひ、家甚た富めるが上に當時の里正の事なれば、其の派振りも一方ならざるが、其の子源五郎の爲に婦を迎へんとするに、長短適はず徒らに過せるが、偶々阿正の才姿あるを聞くや、如何にもして、我か子の爲に之を獲んと欲し、私に機を伺へるに、會、萬助所用あり、勝浦に至りしかば、招て事の要を告げ、因て吾か意を通じたり、萬助之を聞くや、心中窃に計りて謂へらく、苟も此の事に勾當し功を立て、因て此の翁の勢力を借るを得ば、今後、己れの欲する所成らざるなからんと。遂に約諾して歸り嘉右衞門を叩て情を語るに、嘉右衞門も大に喜びて、親族にも謀らず之を許さんと欲せしも、親族の誰彼事の樣を傳へ交々來りて、義父の舊約を捨て擅に巳の、新利を規らんとするを責め、其の暴狀を誚りしかば、流石、嘉右衞門も理の在る所之を如何ともする能はず。明日又萬助を召して故を語り、且つ謀て曰く、如何せば可なるべきかと、萬助亦窮す、因て其の兄道全を勸めて曰く　吾か兄、機才あり、事に臨みて謀るべしと。招き來し鼎坐す。道全策を盡して曰く、村長善次は彼の半五郎と同職に在りて固より親み善し、此の事を託して媒介となし、公然來り請はしめんには、恐らくは、彼輩も之を沮む能はさらんかと。嘉右衞門膝を拍て大に喜び、直ちに萬助を遣はし、潛かに善次の許に往きて、懇に意を授けしめしに、善次亦許諾せしかば、乃ち

相偕に携へ來り議を定む。

是に於て阿正を呼び、事の由を告げ、利害の在る所を說き、慰諭百方至らざるなし。正之を聞き默然として、良久しく答へざりしが、徐かに頭を擡げ、襟を正して曰く。諸君子の妾の爲に計り給ふ所、誠に德とし荷はざるにあらざるも、父か歿するに臨み妾を召し、撫して長二郎に許されき。慈心屬する所、心肝に徹して忘るゝなし、敢て背くべきにあらざるなり。何事も、妾の能ふ所は唯命のまゝなるべきも、此の一事は獨從ふこと能はざるなりと。言ひ了りて潛然、涙、襟を濕はす道全等之を聞き、大に怒をなして曰く、吾か輩唯御身の爲に計るのみにあらず、事成れは、克く御身の義父を利するのみならず、施て吾が輩に至る迄、與に榮耀有らんとすればこそ、斯くも詞を盡すなれ。此の洪福を捨てゝ、落魄の長二郎を慕ふは、何の考ふる所あるかを知らざるも抑も顚倒の甚しき者にあらずやと。嘉右衛門亦頻りに罵て曰ふ、汝執拗、此の婚を肯せざるは、我れ其の故を知れり、意ふに、已に密に長二郎と相通ずるに非ずや、不義者！我れ必ず汝等二人を放逐せずんば止まずと。

阿正涙を飲み頭を垂れて、終始敢て復一言を發せざるなり。（未完）

祇園梶子の話

上野紀士

梶子といふ女は、京都祇園の鳥居の南側なる水茶屋に、うまれましたものでありますから、祇園梶子といひます、家柄のいやしさには、思ひもよ

らず、心ばへの和かでみやびやかなるものでありました。幼少の時分からして、父母にはよく孝行をいたし、家業にも骨を惜まずに、勉強いたしました。

祇園は名高い繁昌な場所でありますから、仕事が此の上もなく忙しうでさりましたが、生れ付きてのすきでありますから、少しでも隙間さへあるならは、草子とか、歌の集とか、物語の本とか、なにくれとなく、よみ習つたので、だん〳〵歌といふものゝ味を覺ゆるやうになりましたから、せめて歌らしきものなりと、自分でによみたきものよと、心がけて居りました。

幸福なことには、田舍などゝは、事がちがひて居りますから、やさしき婦人、みやびたる男子、學者、風流人らが、たまさか立ちよりてきまして、紙ぎれなどに歌を書き付けて、木の枝とか、かきのはしとかに結び付けたり、又はくちぐ〳〵に面白くおかしげに、歌ひあひ、詠みかはす有樣を見たならは、飛び立たんばかりに喜び、うや〳〵しくその人々に向ひて、歌の作り方などを尋ねましたがすきこそ、物の上手なれといふ諺のごとく、いつ悟りたりといふことなしに、遂に三十一文字の情合を知るやうになりました。

これより後といふものは、春の花の美しきを見ては、思をこらして筆をそめ、月の光の澄めるを眺めては、首をかたむけて硯をひきよせ、夏の夕の涼しきには、朝顔のにほひを夕顔によみくらべ冬の朝の靜なるには、霜のおもむきを雪に歌ひはすなど、しきりに風流の方に、ふかく心がけて居りましたので、だん〳〵上手になりまして、年

わづかに十四の時には、歳暮戀といふ題にて、

こひ〳〵て又ひとゝせも暮れにけり
涙のこほりあすや解けなん

といふ一首を作りました。この歌は名高いものでありますので、今でも人々の口のはに上るのであります。

梶子の心がけは、この通りでありますから、その姿色香も心につれて、やさしくしとやかになりました。それゆゑ、みやこ人と田舍人との別ちなくわれも〳〵と尋ね來るやうになりましたから、家の繁昌はいふに及はず、由緒ある人まで、文などを贈りて返歌を求むるやうに至りました。

これから後といふものは、京都や近國人はいふに及はず、西は九州のはて、東は奥州のほとりの人々までで、茲に遊ふ時には、その歌を貰ひ受けて

これは祇園の土産なりと吹聽するに至りましたので、何人がいふとなく、その評判がおひ〳〵廣まることゝなり、はて〳〵は雲の上にまで、召し上げ聞えさせられたる歌ができました。その歌は霰といふ題にて、

雪ならは梢にとめてあすも見ん
よはに霰の音のみぞして

といふ名句なのであります。又その外にて名だかいのは、仙洞おんかくれありし時、おんくやみ申し上げ奉りたる歌なのである、

およびなき雲の上なる哀れさを
天が下とてぬるゝ袖かな

といふ一首であります。氏もなき家に生まれながら、かしこき御あたりのやさしきためしに、聞え上げらるゝとは、ひとへに和歌の德とこそいふべ

きものなれ。

この通り梶子の評判が、高くなりまして、寶永時代の大呼物となりましたが、遂には梶の葉という家集まで遺して、後の世の人々の玩び草となりました。梶子は又俳諧にも畫をかくことにも上手でありまして、百合子の母に當り、池野大雅堂という有名の畫かきの女房町女の祖母にあたりて居ます。この二女子も有名なる文人でありますが、その事は後日折ができましたならは、お話することにいたしましよう。

名のりけり

抑これは

秋の月

文苑

山家月

秋の夜の月のひかりはきよけれど
わかやまざとは訪ふ人もなし
水野忠敬

何處にて見るも同じきつきかげの
ことさらすめるやまさとの月
諏訪忠元

雲霧をはらふ軒端のやまかぜに
小ざゝさやきて月いでにけり
相澤木

山をいでし賢き人にすてられて
木こりの軒にすめる月哉
赤堀信成

矢田香圃

月すみて瀧の音すみて夜もすがら
こゝろもすめるやまかけの庵　山崎房吉

ふくるまで笛の音きこゆ山がつも
かたぶく月のかげをしむらし　石搏千亦

月見むとやまの修業者とぶらへば
たゝ一人してかひならしをり　横山碩

てる月のみやこに遠くいほりして
一人ぞわがみる秋の長夜を　安藤直方

朝夕にながむるみねのまつならで
さはるものなし秋の夜のつき　土田道一

山里もうつりゆく世のかはらぶき
かはらぬ月をなかめけるかな　増山三雪子

世をすてしわれをも捨ず草の戸に
すめるもうれし秋の夜のつき　板倉止子

ましらなく聲はとだえてわが山の
まつにのぼりぬ秋の夜のつき　板倉藤子

さびしさをとふ人もなきやま里は
さしいる月をともと見るかな　頭本春子

さびしさに月もともなる心地して
一夜わかしつやまかげのいほ　奥村岸子

本の間もる月を哀となかむれど
かたるともなき山かげのいほ　峰百合子

月みんととひこし友のもてなしに
くりの飯たくわきのやまざと　大竹以勢子

山ふかくむすびし庵もわきの夜は
月にとひくるひともありけり　渡邊須磨子

すみのぼる月のかげのみ昔にて

山もうき世になりにけるかな　加藤ひな子

ながむればわか世の秋も更にけり
山かげ庵のありあけのつき　設樂御幸子

我山はいはへのやまのうへなれば
月のみやこもちかく見えけり　水橋康子

かり人の妻にやあるらん扉あけて
雁なくかたのつきぞながむる　大河内桂子

うつりゆく都のさまをよそにして
わかやまさとの月をみるかな　佐々木雪子

都へとすゝめらるれどやまずみの
ことしもみたり秋の夜のつき　印東昌綱

今日も又かりのゑものゝ少なくて
柚かいほりの月をみるかな　佐々木信綱

山水にうつろふ月のかけきよし

よつのをごとのちりや拂はむ

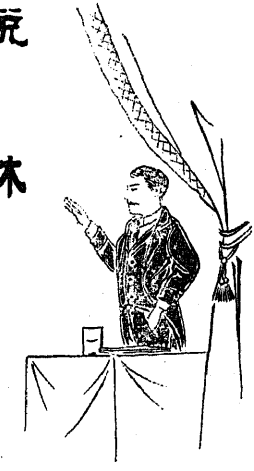
月前雲　東くめ子

月の前ゆく　うきくもを
心なしとや　かこつべき
くまなき影を　なほぬぐひ
光をみがく　物と見ば

花のかげ　小林つねを

優しことふよ　花のかけに
むかしの夢や　かたらまし
こがねの色の　香にゑひて
にはへる花も　捨ていにし

屑うるはしや　なれのごと
かよわき君よ　いまいづこ
やさし小蝶よ　花のかけに
昔のゆめや　かたらまし



說林

本邦古代保育法の一斑（つゞき）

下村三四吉

右は、皇室にての事柄で、もとより、普通の例にはなりませんけれど、下々におきましても、母の乳の無い時分に乳母を雇つて育てるといふことは、よほど古い時分から行はれて居つたといふことは、能くこれで知ることがてきます。もつともそれより外に適當の方法は餘り無いのであるから、必要上發達したのであります。貰ひ乳をいたすといふのは、たゞ定まつた乳母を置かないだけの違ひなのです。

先般皇太孫殿下の御誕生になりました節に、御乳母につきて嚴密な御撰擇があつたことは、いろ〳〵當時の新聞などにも、載つて居りましたから、皆樣御承知の事でせう。古代にも、さういふやうなことはあつたにちがひないと思はれるが併しその詳しいことは今日から知ることは出來難いです。

さて、又今日貴族方に於きましては、御生兒には、乳母をとつて御育になるといふのが、定まりの樣になつてをりまして、御生母の方が乳を御上げになるといふのは、却て取除けの例のやうに考へられてある。然し、それが極むかしからのきまりではありませぬ。御生母は、幾ら貴い方でも、

御生兒に已れの乳を與へて御育てになるといふことは本体で、特別の場合に乳母即ち「ちおも」を召すといふことになるので、後には、おひ〳〵それが一種の定まりのやうになつて、生兒ありし場合には、必ず乳母を召さるることになつた、のであります。それで、保育といふことに就きまして、なほ申上ぐべきことがございますけれども、一寸顯はれて居ることは、上に述べた位のものですから、この邊で、止めて置きます。

次に、古代に於て子供の名を附けることに就いて、面白い習慣があります。そのことは保育には直接に關係はしては居りませぬけれど、緣故のあることゆゑ序に申上げやうと思ひます。

古代の人名のつけ方といふものは、もとより種〻々ありまするけれども、大略數種類に分けるとが出來ます。それについては、既に本居宣長先生が古事記傳に於て分類して置かれたものが、あります。それに依りますと三種類に分れて居る。これは隨分能く概括してあると思ひます。その第一は誕生の際に、何か事柄があると、その緣故に依つて事柄或は品物の名を附ける、それが一種類であります。この例を一二擧げませう。應神天皇の御生になつた時分に、御腕に鞆の形したる御肉のありしによつて、大鞆和氣尊といふお名を御附けになりました。又應神天皇のお子樣の仁德天皇は鷦鷯尊と申上げましたが、鷦鷯とは鳥の名であります。それはどういふ所から命けましたかといふと、丁度其お生れになつた同日に武内宿禰にも子が生れました、その武内宿禰の家には鷦鷯といふ鳥が丁度舞ひこんで來たそれから皇居の御產室には、

木菟といふ鳥がはいつて來た、誕生が同一の日で鳥がはいつて來たのも同じ事柄でふしぎな緣故があるといふところから、其の鳥の名を互に取替へて名を命けたやうの仕末であります。それで、仁德天皇は之を大鷦鷯尊といふ名を申上げるやうになりましたし、武內宿禰の子は木菟宿禰と申し即ち葛城家の先祖になつた人です。それから御承知の通り聖德大子の御名は厩戶皇子と申しあげまするが、これは母后が宮中の厩の前で御產氣づきになつたといふことに因んだ名である。かゝる種類の例は隨分澤山あることです。（つゞく）

現今の幼稚園保育法につきて（承前）

東　基吉

幼稚園の唱歌につきても亦吾人の意を得ざるもの多し凡そ幼稚園に於て唱歌の材料を擇まんとする根本原則は、彼等幼兒を以て尙未だ發達せざる未開人種と見ること之なり。從つて吾人の見て以て、優美高尙雅致に富める歌曲を以て直に移して、彼等に用ゐんと欲す、誤れるの甚しきものなり。或は曰く、幼兒に適せしめんとする歌曲の簡單明瞭なるを擇むべきは何人か知らざらんたい現今に於て此の如き適當の唱歌なきを如何、則現在あるものに付きて之を取る亦已むを得ざるなりと。まことに已むを得ずと云はんと欲すれども、これ抑々自家の幼稚園に對する不忠を表白せるものにあらずして何ぞや適當なる者なしといつて、局外より適當なるものゝ與へらるゝを待つ、はた何の日を以て適當のものを得んとするか。

抑々幼兒に與ふべき唱歌の數は敢て多きを要せ

ず、彼等は小學の兒童と其傾向自ら異なり。新しき唱歌を多く覺えんとの刺戟よりは、寧反つて既に知れる面白き唱歌を幾回にても歌ふことを喜ぶ者なり、此傾向を察知せず、即矢鱈に多くの新しき唱歌を提出して彼等に敎へ込まんとす。こゝを以て勢不適當極まるものをも擇んで之を用ゐるに至るものなり、若し夫れ或宗敎的幼稚園に於て採用せる如き、直接に神を讃美し神の榮光を知らしめんが爲に唱はしめつゝある唱歌の如きは、敎育上寸毫の價値なきものといつて可なり。

談話は通例庶物の話、即通常の自然物加工品等に付きて日常兒童に親近なる者に付きての話と、修身の話、則有益にして興味ある事實及寓言につきての話とに分かれたり。抑々幼兒が話を好むことは、本來の性質にして最早くより顯はるゝ所の本能なり。則巧に之を利用せんか、彼等は之によりて人生百汎の關係を理解すべく、德性の涵養、觀察注意の發達、發音言語の練習は、最も自然的に最も容易なる形式によりて得らるゝなり。從つて、若し其方法を誤らんか、之等の効果を收むること能はざるは勿論、反て夙くより不注意の習慣を養成し、物事の觀察に緻密を缺く性質を有せしむるに至るは明なり、是に於て談話の材料の撰擇と其方法とは最も注意すべき要件となる、吾人は或外國人の幼稚園に於て、聖書中に記されたる基督が當時の猶太人を誡めたる話を敎授せるを見たり、基督の說敎固より巧妙を極むといへども、これ抑々當時博學の猶太人に向つてなせる者、併も直に移して之を理性の甚だ發達せざる幼兒に向ひ、尙且最も拙なる談話の方法を以て傳へんとせるを

見て、吾人は寧其大膽なるに一驚を喫したりき。

外國人の幼稚園に於ては、時々此の如きものあり、我邦人の幼稚園に於ても、其材料の撰擇甚た當を失せるものありてこゝ七八年前の小學校修身書にありける修身談を其儘持ち來りて談話の材料とせるもの少からず。

吾人は幼稚園の談話の材料としては、專ら寓言童話によらんと欲す。時に神話、英雄談を交へ用ゐるべしと雖、其最も彼等の趣味に適し、嗜好に投ずるは寓言童話に如くはなし。これ此二者に於ては人世百汎の關係が、極めて幼稚なる形式によりて顯はれ居るを以てなり。尤も此二者の中に於ても、撰擇の標準は自ら存するありて、寓言童話ならば悉く採用すべしといふにはあらざるなり

（第二卷第七號家庭欄參照）

而して所謂庶物話の如きは極めて普通の自然物人工品に對して、幼兒と保姆とが隨意の談話によりて授くべきものなるに、往々にして小學校の理科教授的の形式に流るゝあるは深く注意せざるべからず。吾人の見る所を以てせば、所謂修身話庶物話等と區別することなく、寓言童話の中に於て一切を包括せんと欲するなり。

幼稚園に於ける唱歌を教授せんとするは、圖畫を最必要とするが如く、談話に於ては、圖畫の殊に必要なることは、改めて言ふを要せず。

手技に於ては、言ふべき事更に多けれども、餘りに長文に亘るを以て、簡單に數言を以て結ばんと欲す。手技即幼稚園恩物を弄ばしむることに付きて、幼兒の力不相當なることを課し、殆半以上保姆の手傳を以て成さしむるが如き弊は現今尙多

の幼稚園に見る所にしてどの方面より考へても、無益有害なるは最も明なり。幼兒の獨立心を害して依賴心を增長せしむる事之より大なるはなし。此の如き方法の、現今無識なる保姆によりて到る所に行はるゝは慨嘆の至といふべし、稍進みたる弄ばせ方を取れる幼稚園に於ても、尙且つ古來傳襲の順序に束縛せられて、其範圍を越ゆる能はず、究屈極まる法則に司配せられて、幼兒をして自由の活動を試みしむる能はざるもの比々殆ど然り。

抑々恩物の順序の如き、既に其の根本原理にして、破壞せらるゝ以上は、必然に自ら解躰せらるべきものに屬す。彼の原理にして幼兒保育上に應用せらるゝ事の不可能なること既に明にして併も尙屹々として此順序を墨守することは、これ實に不合理の甚しきものなり、たゞし、彼の順序に從ふことが、最も便利なるが故なりといはゞ、吾復た何をか云はんや。

以上の四課目は即幼稚園保育課目の總べてにして、一日五時間內に於て、交互に幼兒に課するものなり。此の如く區別せらるといへども、由來幼稚園は遊戲を利用して敎育する場所なるを以て之等のものは悉く遊戲的性質を帶びざるべからず、換言すれば幼兒に過重にして苦痛の感を與ふべからざること之なり、即ち常に嬉々として快活の情に充ちて從事せざるべからず。尤も、幼兒の心情は常に變轉極まりなく、一寸した事によりても泣いて見たり、ス禾て見たりする事あるは免れざれども、苟も幼兒の活動を抑制して、人爲的不自然的なる一定の規律の下に强いて服從せしめんとするが如きは極めて不可能なり。

之を要するに、凡そ一施設の價値は、其存する所、物にあらずして實に之を運轉する人にあり。尋常科准教員の資格より有せざる者に向つて、保育法の改良を叫び幼稚園の効果を望む。不當之より甚しきはなし。吾人は現今我國に於て幼稚園を以て、純然たる教育系統の中に加へながら、何故に之を改良發達せしむる方法を講ぜざるか、何故に之を運轉する保育者養成の法を奬勵せざるかを怪しむものなり。（完）

寄書

題賞文掲載のため、他の玉稿は總べて次號に讓り候。

懸賞文の集まりたる數比較的に少かりしは遺憾に候。萩子君のは選を望まずとの事故、等外と致し候。

幼時の家庭（等外）

東京　萩子

あゝ幼時の家庭、此五文字はいかにたのしき記憶を私の心から呼び起しましたでせうか。いかにかなしき記憶がうかび出たでありませうか。其當時小さい胸にきざまれたさまゞの印象、今は心

の底に沈んで居つたそれが、追懐といふもしろいはたらきの爲に、さながら昔に歸つたやうにあり〳〵と出てまゐりました。

私の生れましたのは、父母兄二人が健全で、一家擧て故郷を遠く去つて、他國に暮して居つた時の事で、一家團欒の樂しい中に生れ出ました。男二人の次の女といふので、たれからも珍らしがられ可愛がられたといふ話で、其時丁度九洲に出征して戰つて居つた私の父は、私が生れたといふ知らせを得て、戰爭で氣の立つて居る折柄とて「女であるとか女ならばいらぬ」など、書いてよこしました。そうしてその戰もやんで歸つたところがいらぬどころか、はじめての女兒といふので大喜で愛したといふ事を、いつも母が話しては笑ふのでございます。さて、私の二才の時に一家は故郷に歸りまして庭園の廣い靜かな家に住みはじめました。此家には池も畑も大木も花咲く草も果物のなる木も野菜も、いろ〳〵ありまして、從て虫も來れば鳥も來る、其上に犬が飼つてあるといふので、つまり私の周圍には、自然の動植物が多くございました。父も母も植物培養が大好で父が夕方に鍬をとれば母は花壇の手入をするといふ有樣で、私共兄妹も、しらず〳〵植物に親みて之を愛護するといふ心情が養はれましたので此廣い庭は實に親子五人の樂園で、三人の子供は友達をさそひこんで、多勢で勝手に飛んだりはねたり草木を植ゑたり花をとつたり眞に樂しくあそびました。私は今も誠に花好で庭の片隅の雜草の花までもいひしらぬ美感を惹起しますが、此植物に對する愛は全く此庭の賜でございます。わゝたのしかりし

此家此庭は今は山川百里のあなたにあります。

さて七才の時に又もや一家擧て他國に出かけました。其道中のたのしさは今でもあり〳〵と思ひ出せる位で、多くの故郷の人に送られ、人力車に乘り、滊船に乘り、滊車に乘り、旅館にやどり、他國に住ふなどゝいふ變化は、小さい私をよほど喜ばせたと見えます。さうして私の家が二度も他國に出かけました爲に、其頃としては割合に多く旅行をし、從て家の内でも諸地方の話がはづむといメやうな事から、知らぬ處を見たいといふ好奇心を惹起したと見えまして、私は小さい時から旅行好で、今でも一年に一度はぜひ旅行せずに居られぬほど旅行を好みますが、其原因は幾分か幼時の旅行にあるかもしれません。

其土地に居る三年の間に、私に弟ができました。

一家は父母兄二人私弟と六人になりまして、賑かさたのしさは增すばかりで、まだ小さい私が弟を抱かせてとせがめば、父が又母の膝から我季の子を抱きとるといふ始末で、此弟を中心として一家は實に春でございました。實に私は此頃まで世の中の悲、さみしさといふやうな事はすこしも知らず、まるで春の花に醉うて居る蝶のやうに成長してまゐりました。

ところが老少不定の世の中とはいひながら、此一家を賑はして居つた我弟の命はあまりに短くて、生後二ヶ月もたゝぬうちに急に病を得て亡くなりました。さあ其時の父母の悲、實に私は小さいながらに死といふものはいやなものである、自分は死にたくないとつよく感じまして、死といふものに對する感情、一家に人の死んだあとの有樣

をはじめて經驗いたしました。

弟の死が一家を急にさみしくしたのについゞいて其の翌く年一家が又故郷に歸るとすぐ此親子團欒の中心である、我一家の柱である我父はかなしくも十六才を頭に三人の子を殘して歸らぬ人となりました。其時の母のなげき、私共兄妹三人のかなしみ之はとても筆につくすことができません。其時私は九才でございましたが、かやうに死の冷たい手が最も幼い我弟最も大事の我父をさそひまして、四人の母子を殘した其あとの家庭といふものは、それは弟の死以前と比べることのできない、さみしいもので、つゞいて母が病氣をする、兄がわづらふといふので、私は實に悲哀心配といふ點で大打撃を蒙りました。私がある年齢までは、いはゞ悲觀的の人間であつた事、病といへばすぐ死を連想してどうか母は死なゝいやうにとたえず小さい胸をなやました事などは此父の死といふことが原因となつてをります、但し亡くなつた父の子たるにはぢぬやうに、父なくして育つる母に心配をかけぬやうに、良い人になりたいといふ希望決心は父の死當時母の教訓に由て深く私の胸にさざまれましたそうして、大きくなるまで此希望と決心は私を支配いたしました。

父の死後、母兄の病氣もよくなる頃、やつと一家は落付きまして、土地は靜かなところ、家は前にも住んだ庭の廣い家ですから、母は前にも增した植物好になる、一人の兄は非常に動物が好で犬を飼ふ、雞を飼ふ、蚕を飼ふ、兎を飼ふ、といふので、私は通學の餘暇にいつも之等の世話役で、ます〳〵動植物に親しくなる。其上に隣家に私を

非常に愛してくれる一人の婦人がありまして、此人は山とか川とか月とか凡て自然の景色に對して趣味を持て居るので、其感化をうけて、私は自然の景色を愛する情が大變養はれました。こういふ風に私が天然を深く愛するやうになりましたのは實に幸福であると思ひます。

それからもう一は私は極小さい時から書を讀むといふ事が大好で、十才から新聞の拾ひ讀をしました。いろ〳〵の雜誌も讀みはじめました。高等小學時代には新聞狂雜誌狂と言はれました。今でも讀書が私の一の大きな樂になりますのは此影響がよほどでございませう。

たのしかりし、かなしかりし私の幼時此邊で筆をおきませう。

幼時の家庭（一等）

東京　友彦

黄ばむだ木の葉がひら〳〵と舞ひ落ちて、夕風が冷やりと身に浸む頃になると、どれ程の樂しさに氣を奪はれて居ても、私は忽ち二十年前の昔に歸つて、丁度今頃であつたあの晩の、凄い〳〵恐ろしかつた、悲しい記憶を呼び起さずには居られませぬ。集散離合は定なく、さても一時は分限といはれた私の一家も、分散といふ浮世の風の吹き舞はしに母先づ去つて父後に逝き、家を繼いだ一番の兄もすぐ兩親の後を追つてからが、後は丸でちり〳〵ばら〳〵私は先づ他家へ貰はれて行く、私の姉……懷かしい私の姉は……左樣私よりは丁度八つの年上で、其時は丁度十九であつたのが、親類の叔母の家に行て、厄介になると云ふ悲慘の有樣。嗚

呼此悲慘の運命が更に次に來るべき一層悲慘の運命を姙んで一生忘るゝ事の出來ない深刻な印象を私の腦裏に銘するに至るべしとは、當時よもや誰も豫想する人はなかつたのでせう。

叔母は姉を自分の女の樣に慈しまれた事は、私でも覺へて居ます。けれども、當時は叔母の家もさう有り餘まる家計といふではないのであるし、夫に夫の手前を兼ねる處からして、一人でも口を減したいのであつた、姉も十分夫を承知して居る夫でとう〳〵田舍の或る人に嫁いで行たのは、矢つ張、今時で、秋風冷に、虫の音の漸く幽かになり行く頃であつた。

行つてから、彼れ是れ一年も經ちましたか＝叔母の家は相變らず究して居つた＝嫁して行つた翌年の秋の或日の午後、私は學校から歸て來た所が姉は田舍から一寸歸つたのだといつて、私の養家へ來て、養母としきりに何か話をして居る。一年振りで姉の顏を見た私の、其時の喜といふたらなかつた、何か言てくれるだらうと思つて、いきなり側へ走つて行つて「姉さん？」といつてチャンと座つて構へて居ても、「オー友さん？」といつて、一寸ふりむいて微笑した切り、又養母と話しかけた、勿論、其話は何の事だか、私には分らなかつたからして何だか手持無沙汰の氣がしたが矢つ張り、姉の側に座つて今日習つた、讀本のおさらへをして居ました。（一所に居つた時は、いつも其通りであつた）

四時頃になつて姉はもふ歸るといつて養母に挨拶をして居る。夫から私の方へ向いて、

「友さん、之からもねよくおつ母さんを大事にし

て、一心に御勉強なさいよ」

其時の言葉の調子が、今迄の姉の、丸くて温かなのとは全く違つて、何となく變に心に浸み渡る樣に感じた。見ると姉の目は涙……であつたのであらう、やゝうるんで、じーつと私を見て居た。

姉は去つた、格子窓から見送る私の顔を、冷やりと秋の夕風が一陣吹き去つた

＊　＊　＊　＊　＊　＊

夫から廿日も過ぎたであらうか、或日の夕方叔母の所から、急いで來いといふ使が來た。行つて見ると、七八人親類の誰れ彼れが集つて、鼎座になつて、極めて重々しい口調で、何かひそ〳〵と相談して居る、そして一番先に目に付いたのは、叔母の殆んど泣きくづれ相な樣子であつた。一見した許りで、此場の光景の只ならぬに私しの小さな胸は先づ激しい鼓動を起した。

叔母は泣き腫らした目で私を見て「國子が急病だといつて來たからね」といつて、又うち伏して仕舞つた。この一言で、私の胸には更に新しい鼓動が高まつた。

相談の結果は、つまり誰か一人迎へに行くといふ事になつて。叔母の夫と他に一人、すぐ其場から草鞋がけで出懸けた、が、一時間程たつと、二人は歸つて來た、道で向から駕で來た國子と遇つたのであるといふのだ。私は夫を聞いて、病氣でも、又姉さんに遇はれると思つてひそかに喜んで居ました。所が、何ぞ計らん、嗚呼何ぞ計らんです。姉はもう既に死んで歸つた。併も恐ろしい劍の下に伏して死んで歸つたのだといふ事であつた。この恐しい報知、この凄い報知、この酷たらし

い報知に接した、一同の驚愕愁歎、中にも叔母の仰天は今となつてはとても筆にも言葉にも述へられません。而して私は、嗚呼私は、今又一人の姉を此不慮の變で失つた私は、そッと次の間へ行ッて、疊に喰ひ付いて思ひ入り泣いたのであつた。

續いて恐ろしい、悲しい凄い光景が顯はれた。姉が送られて來たといふ、向ふの親類の家に、皆で揃つて行つたのは丁度夜の十時過ぎ。見ると佛壇の下に明滅たる蠟燭の光りの影に廿日前の面影其儘の我姉が、悄然たる姿で壁によりかゝつて居る。たゞ背ては花と紛ひし唇も今は堅く結んで物言はず、背ては我が惡戯を誡めんとて、やさしく睨み給ひし慈愛の眼は既に光を失つて居る、兩手は力なく膝の上に載せられ、兩足は其儘伸ばされて、

叔母は一眼見て「オヽ國子」といつた切り、兩の手で顏を覆ひ「ヨヽ」と泣き出した。この無殘の光景には、誰も彼も同じ樣に顏を背向けた。折しも颯と音して落ち散つた庭の梧葉一つ、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日の夕方悲しい〳〵葬らひが出た、とう〳〵我姉を永遠に奪ひ去つて仕舞ったのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

姉のこの悲境に死んだ譯は、當時私にはまだ分らなんだ、夫から大分年月が過ぎた後、次の樣な手紙の斷片を叔母から見せて貰つて、略ぼ其が分つた事でありた。死ぬる十日程前に姉から送したのだといふ事で

……何事も〳〵姑樣の御氣に召す樣にとたゞ一すぢに夫のみ心がけ居り候へどもと

ても〳〵足らはぬ勝ちの私の事に候へばする事なす事すべて御氣に叶はずと見え日々責め折鑑せちるゝはまだしも今日此頃は三度の食事すら ろく〳〵下されず力と頼む我夫さへ……誰に語りてこの苦しみを分つべき便とてもなくたゞ〳〵一度づゝ洗濯の水くみにとて谷川へ參るこれのみがせめて一日中の樂しみに御座候……されどいか計り苦しとて一旦出でゝ人に嫁したる身のよしや苦しさのあまり此儘こゝに死すればとて何をか恨み候べき何も〳〵たゞ宿業とあきらめて覺悟致し居り候……。

評。句々皆涙、宛然是れ一篇の悲劇。

幼時の家庭（二等）

丹波　不忸軒人

私の家わ代々藩の劍術師範役を務め、今わ亡い父も維新までわ其役を務めたのでありますし、して私わ父の廿八歳、母の十九歳の時で、明治の七年に舊藩邸に產れました。其時家族わ祖父と兩親と三歳の姉とが有りました。何分にも武を以て立ッて來た家に女子が生れて皆な失望して居る處に、男子の私が生れたのですから、一家内わ勿論、親戚近隣にまで非常に悅んで貰うたそーです、當時父わ町の戸長を務め、傍ら邸内の道場で子弟に劍術を敎授しました。此頃わ可なり世襲の財產もありました。私が五六歳の頃には父から種々の談をして、貰いましたが、殊に毎夜父に手枕をして貰いながら、楠公父子とか義貞とか義經とか那須の與市とか其他色々の人の忠勳談を聞き、之等の人に就いての敎訓を受けましたが、之れが唯一の樂みで、いつも日の暮れになると寢床に入るのを待ち

兼ねました、今も猶暖い柔かな其手が、耳の上邊に横はッてあるかのよーに感じます、又七八歳の頃から毎日夕方になると、一時間程道場に出て劍術の稽古をさせられましたが、何しろ小さな頭を大きい竹刀でポン〳〵やられるのですから、之れが唯一の苦でありました。右等の教育に依ッて、私の幼心にわ已に士の家に生れたものわ十歳を超えたならば一人前であるから、忠義を盡さねばならぬ、忠義とわ君の身に代り死ぬる事である、忠義をすれば其れで親にも孝行になる、忠義の爲めにわ命わ惜くわない、嗚呼エライナー正行わ、義經わと箇樣な考えを持ッて居りました。七歳の時小學校に入學をしましたが、其以來私が課業中で最も面白く感じたものは歴史談でありました、高等小學校に在る頃にわ忠を盡すには多くの方面があると云う事を知りました、して卒業後、歴史や地理を學び、古英雄の事蹟幷に古跡等に出逢いますと、甚だしう感情を刺激しますものわ彼の寢床の中の談材になッた人等でありましたが、今も地理と歴史の研究にわ比較的多くの興味を持ッて居ります。

父わ私が八九歳の頃に戸長を辭し、後ち數種の實業を營みましたが、遂に惡奸の爲めに莫大の損耗を生じ殆んど産を盡しました。或人の勸めに依ッて巡査を奉職しました時に、私にわ弟妹各一人づゝありました。都合によッて姉と私とは親類に預けられる事になり、萬斛の涙を飲み名殘を止どめて、温かい家庭を離れましたのは恰も十二歳の秋で、爾來十七歳の春まで五ヶ年間に二三の緣家の厄介になり、子供相當の苦辛をしました、此間

に於て自分わ人の眷顧ばかりに依賴するのは男子の爲すべき事でわない、自活わ神聖である、獨立（或る範圍）わ立身の基礎で尊重すべきものであると云ふ事を深く感じまして、斷然緣家を去り、專ら他人の間に於て相當なる務めをして自活と修學との資を得ました。其間に蹉跌して止むなく目的を變換しましたが、結局今日でわ小學校の訓導を務めて居ります。（終り）

評。取り出でゝ、どうといふ節はなけれども、おち付きたる書き振り、樂しかりし毎夜のお伽話に吾も自ら引き入れらるゝ心地しつ。

幼時の家庭（三等）

東京　平野ゆき子

雲雀の聲を高く聞き、菜の花の黃金いと近く見て、ちらくとふりくる花吹雪、東風ゆるく香を送りて袂を返すに、胡蝶ゆたかに飛ふなど、實に春の日の景色眺めて何人か心に邪をおかめや。

人の世の春なる幼なき頃の家庭のさまの、しかく樂しき人こそ幸多けれ。嬉しき我父が學資出して小學校に通はせしめぐみによりて、子といふものゝ盡すべき孝道は聞き知れり。さるを今父母の名を汚して、忌むべき我家庭を人に知らしむる我罪を問ひ給ふ、こひねかはくは讀みて其罪の何れにあるかを敎へ給へ。天眞爛熳とか云ひて愛すべき幼時のものかたり、はづかしさを忘れいひいづる我身の上、春ならねども立てめし霞、うすものゝ帷したらんが如く。かすかにをはろ氣なれど、妾には初めより母なし、唯乳母の八重の何となくなつかしう、慕はしうて、片時も傍はなれし事なかりしに、ある冬の夜半なりき、父も祖母も姉も

叔母も他の下婢等も暖かに眠りにつきし後なりき、長き間、針手に持ちし八重の我顔つくづくみては涙くむさまのあやしまれて、「八重よ何れへ行くや」と妾の問ひしに「否とよ八重は何處へも行き侍らず、をとなしくやすみ給ひね」とてしばし妾の傍に横はりしが、夢かうつゝか「あはれ不幸の子よ、卿が姉は其母の世を去りし計りに人に愛さるゝに、幸うすき次子よ、此後ともよく父上に仕へませ」といとかすかにひびく言葉の耳に殘れと、主の影はいつしか消えたりき。此翌日より八重の姿見えざりけり。

叔母の罵しる聲、父の怒る聲は日一日とまさりて、兎に角く妾は麻布なる親類の養女となりぬ。そは我姉のまだいとけなきが上に、妾の八重を慕ふがうるさしとてなりと後にきゝたり。

妾は麻布に移りし後は、日毎樂しく遊びくらせしが、八重の事は忘れさりき、七歳の四月近きわたりの學校に入りてし時、ふと八重の我牛込の實家に戻りぬといふ噂きゝて、養母に一度家に歸らしめ給へといひしも聞かれざりき、されど其他の事は妾のまゝならざるはなく、母なき我實家よりは何事も樂しくて過せしが、翌年一月妹（養母の子）出生せし時より妾は悲しき身となりぬ。そは母の行ひ心得かたう變りしにて、好人の養父は店番の外は何事もせず、飯の時のみ顔見れども、養母の前故ものいふ事もならず、日毎赤子背負ひては使ひはしり、洗濯などに、學校休むもめづらしからず、妾が香の物嫌ふとて副食物あたへざるは、まだよし冬の寒き日、妹の衣服洗ひし手を火鉢にかざす間もなく、次子よ最早正午ならずや、物

置より香の物出し來れとの命令いなみ難く、殊に妾は幼きより此養母に育てられて我まゝのみなし習ひし故、香の物など持つ事だに好まず、思はず顏そむけしとて煙管取りあげ妾の頰をしたゝか打ちし末、其香の物切る時、捨つる部分多きに過ぎたりとて、一度捨てし物を汚れしまゝ、妾の皿の上にのせつ。さて妾が食ひ得ぬを見て「我儘物。」と叱りし上に妾が誠の父と母（は死せしと思ひしに）の事あしざまにのゝしり「あの人に此の子は當然よ」などいふ。子供心に口惜しうて「否、母上、妾の父も祖母も此の事深く心をいためて行末を案じ居れど…」云はせも果てず「心憎くき物言ひ振りよ」と妾の口押あけて無理に汚なき香の物押し込みぬ。此の樣目の前に見乍ら妹を抱きて無言なりし父も、夏の暑き日中に庭の草むしれと母に命せられしに、直になさゝりしとて、夜に入りけれど家に入れず、身に一ッの下帶させしまゝ庭の木に縛り悲しむも知らぬ振、泣けど叫けべど聞えぬ風して蚊帳の中に入りし養母に詫して此時計りは妾の爲を計りき。妾は漸く家に入るを得て食事せしに、父が蚊やりする杉の青葉の烟り喉に入りてむせかへれば「ソレ食過ぐる腹も身の内てふ事知らずや」と膳臺所に押やりぬ、あゝ我養母はかくて妹を愛したりき。人。同じ人の子なるものを、他人の生みしと我生みしとは斯く計りの差あるものにやと思へば我誠の母のこひしうて〳〵

學校用の半紙は一日一枚の定めなるに、友どちが鼻血出しゝ時に反古與へし爲に、七時間戸棚の閉閉にあひ、親しき友の花簪妾にめぐみし時に「返して來よ、家風なれば一切物もらふ事許さず」と

申渡されし時の悲しさ。朝夕の水汲み座敷掃除、飯までかしぐ身は午後より學校に出づる事もめづらしからず。校友に初めはあやしまれ、後にはいやしまれて愈我實家の慕はしく成りゆきし折も折遂に一度牛込に歸る事とはなれり、父上、姉上、祖母殿、叔母樣も如何に暮して居給ふかと思ひつゝ、家に歸れば、嬉しや母上、妾が常に物足らぬ心地せし母上ありき、然かも其母上は常に慕ひ〳〵し八重なりき。四とせ餘り見さりし家の内に母ありて、妾を抱きて「をゝ次子よ」とばかり我顔眺めし目に涙溢れたるを、我は嬉しさに心うばはれて氣づかざりけり。翌日父は例の如く車にて出でゆきしあと、四年前はあらざりしか、心つかざりしか、叔母のみ家中に威を張りて、母の目の前にて「成り上りもの」といふが耳障りなり其度毎に母が顔そむけて涙ぐむは何の故か、妾はたゞ悲しくて、祖母は相かはりもせず姉の事にのみさわぎて、其爲に母の顔に唾はきかけし事すらあり。一日妾と姉と二人して二階の梯子にて手まりして遊びし折、二階の坐敷にて父のいそがわしく母を呼ぶ聲に、母の急き梯子登らんとて、あやまちて姉の手ふみけるに、姉はさのみにもあらぬに聲張りあげて泣き出せば、父あはたゞしう出來りて、妾の足をいたくふみて驚く妾に目もかけず見ずや次子とても足ふめば泣くわ初子よ母の傍を去りて來れ、をゝよき菓子を與へんと父の聲聞えたれど、足の痛さに泣き居たりけれは其後は知らず。此事も何の故か更に知らざりき。其後妾は母の涙に送られて、再び麻布の家に歸りき。まゝしき母、(或ひは妾のまゝ子心！)に育てられ、時に

實家に還りて母に慰めらるゝ事あるも、妾は遂に正しき道進まざりけり。かくて父母に心づかひ掛けし事も度々なりしが、今年十七歳の春初めて母の誠の身分とをひたちなどさゝてやうやく誠の人に歸り、看護婦志願にて某病院にあり。過ぎし事ども思ひ出づれは人に言ふはをろか、我と我身にはづかしき事多し。わゝ誰の罪なりや。妾は物淋しき夜半、獨過去の事ども思ひ出でゝは妾の實母遠山八重子をうらむ事すらあり、妾はかくて世をうらむ事多きが故に、母は猶我身を氣づかふなり、妾は母に向ひて安んじ給へ、妾は米國のモルヒネ夜刄トブバンを學ぶものにてはあらず、たよりなき病ひになやめる人のみとりするが願ひなり、といふが常なりき。

五。幸少かりし家庭に生ひ立ちて、今は多くの人に幸を授くべくなれる御身の上こそ奇しくも尊さけれ。

幼時の家庭

岡山　操女

私の生家は、昔よりの田舍家、住む人少うして、室の數多ければ、他に居を定むるの要なしとて、兄上の工場にて、使ひ玉ふ職人ども、十人餘宿らせ居れば、殊に賑やかなり、兄上は姉上を娶り玉ひて、十年目なり、其間に三人の子供生産したりしかど、皆亡せてたゝ今年四歳になる、國夫と云へるのみいとも愛でいつくしまれ、掌の上の蝶よ花よと、養育し玉へは、他の人等も皆御機嫌のみ取りて、萬殊の外我儘なりき。母上は未だ、年若けれど、八年前に父亡せ玉ひしより、世は兄上に讓りて、諸事心にまかせず、只國夫をいつくしみ玉ふ事のみ仕事の如し、この中へ丁度嫁き居たりし私の、三歳になる桂二と云ふを連れ子して

不縁となり、歸り來りしなり、嗚呼世に女ほど、悲しきものはなし、如何に賴みに思ふ良人なりとて、如何に愛兒の大切なる父なりとて、心の變り玉ひて厭はるれば致方もなし、生家に父の在さば斯くまで遠慮もあるまじけれど、世捨人同樣なる母上のみなれば、何事にまで、私等親子は、打敗けて平身わび入るのみ、されば國夫も子供ながらに、何時しか、侮りて私の言ひ聞かす事など、少しも聞かず、却つて廻らぬ舌にて口返事をなす樣なりたり、初の程は母上も、同樣に二人を取扱ひなされしかど、姉君の機嫌惡しければ、成るべく桂二に、馴れられぬ樣、つとめ玉ひぬ、其の癖か桂二も遂に母上を厭ふ樣なりたり、茶碗など桂二の粗匆にて、碎きたる時は姉上の舌うちなりして、厭みを言ひ玉ふ事の、口惜しければ、何か持てるを見付る時は、直にもぎ取るなり、故に此頃は何か持てば、後に手を廻し、隱す樣なりたり、國夫は母上なり兄上なり、外出の後を逐ひて、是非從ひ行くなれど、桂二は後を逐へば、聞きわけのなき子よと叱らるれば後を逐はずなりたり、兄上土産を持ち歸へらるれば、國夫を呼びて包のまゝ與へらる、桂二は傍から、欲しがりて爭ひとなる、一才兄なるだけに、何時も勝利は、國夫にあり、敗けたる事のくやしく、聲を限りに泣き立つれば、母上も見兼ねて、少し分配せよと、再三進められ、致方なきまゝ少しむしりて、與ふれば桂二は手にも取らず姉君は是を見玉ひて、「國雄や桂さんは少しどもは厭やだつて、皆お上げか前にはいゝもの上るよ、」とて、美しい箱入の菓子を、そのまゝ與ふ。されば國夫は前に抱込み居りしを投

り出すなり。凡べて子供は何にても同じ樣なものをほしがれば、桂二も亦其の美しいのを、ほしがりて止まず、姉上は母上に「桂ちやんは、人のもつ物を出せつて、上げたものは厭だつて、意地が惡い事ねー」と話されぬ、私は思へり、始土產を與ふる時に、二人に同樣に分配して與へさへすれば何れも、善からんに」とされどそを云ひ出せは又風波のもとなれば、何も得云はず、獨り心に思ふのみ、人知れず我膝に抱き上げては、涙はら〳〵と、過ぎし事ども思ふのみ。嘗ても金錢花の美しく咲き居る中に、とんぼ捕らをんとて、二人そが中へ入り踏み倒す處へ、「これつ、」と不意に聲をかけられて、一人はワッと泣きて逃け歸へり、一人はエヘヘと、打笑ひ猶踏みにじりたり、同じ家に育てられながら斯くまで相違のあるべしとは、さても、此先き如何にかならん、察し玉われよ諸姉よ、諸姉の中に私の子供の如き境遇の方、ありやなしや。

評。慘たる幼兒の家庭、讀者をして同情の涙止めあえざらしむ。吾は桂二氏の將來の多幸を祈るや切なり。

窮兒の惡くなる有樣

ひさ子

私は此前に東京市養育院に付て書きまして、同院感化部の事は次號にでもと申しておきましたがまづ初に同部に居る少年、即ち窮兒であつて普通の世の中にすておいたならば、どんなに惡くなつたか分らないやうな浮浪少年の、普通の世の中に於ける種類や變化を述べたいと思ひますから、同院の許可を得まして、けふはひとつ先年同院で取調べられました「窮兒惡化の狀況といふ小冊子の一部を御紹介することにいたしました。

一窮兒の種類　父兄に置き去りにせられたもの、棄てられたもの繼子で繼親から放逐されたもの、親が乞丐をして子も亦乞丐であるものなどが主なる種類で其外にも種々の事情に出るものが多くありませう

一窮兒の變化　右のいろ〳〵の窮兒は皆獨立で正しく生活する力のないものでありますから、乞丐となり、掏摸となり、窃盗となり、遂には强盗となり、又は行旅病者となるといふ情ない境遇を經るものが多い。

窮兒であつて人の袖にすがり、人の軒に立つて哀を乞ふものは五六才以上十一二才以下が多いので、風姿を紙屑拾ひのやうにして、種々の小盗をするものは十才以上十四五才まで位のものが多い

そうして只乞丐をする方のは多くは大人が其蔭に居て之を使ひ、なるべく哀れそうに見せかけて、他の哀憐の情を惹かんとするもので、十年以上となると人の哀憐の情を惹くことが少くてもらひものが少い爲に止むを得ず盜んでゞも、生活するのである。

一ボタハジキ及カツパラヒ　之は前のやうな境遇を經過して成長した窮兒が將に掏摸窃盜などに變化して行かうとする一階級の名稱である。そうしてボタハジキといふのは掏摸の雛であつてカツパラヒよりは一層利發で好方に長したもので、十四五才十五六才の者が多い、彼等は緣日又は種々の群集をあてこんでこまかい金品をすりとるので別に親方には屬して居らぬ、但し其中の敏腕な者は漸次親方に屬して眞の掏摸に化してゆく。カツパライといふのは多くは紙屑拾の姿をして居つて、紙屑や襤褸を拾ふと同時に他人の隙を窺て、衣類其他履物などを手當次第に盜み去るので、其他辻店食物店の物神佛の賽錢などをも盜む者がある。之等の惡少年は晝夜種々の手段を研究してかゝる惡を働くもので惡事にかけて辛抱つよいのは驚くべきほどである。そうして其働の巧妙な者は窮兒群中の兄株に尊ばれ、遂には多くの窮兒を使役して親方となり、子分から收入高の幾分かを徵收して彼等は乞丐の方法から惡事を働く手段を敎授するのである。

十四五才までに、之ほどまでの境遇を經たものはなほ成長するに從て如何に成行くか實に彼等の成長は社會に大害を流す泉源と化するので考へればなほど戰慄せずには居られぬ。

一ボタハジキ掏摸となる　何處の市街にも掏摸の多いことは甚しいもので、世の中が其害を蒙ることも實に甚しい。そうして掏摸の中、十中の八九はかの窮兒であるボタハジキの轉化したものである。そも〳〵窮兒が掏摸と化するには二種ありて、一は掏摸の親方又は其子分から撰拔せられたもの、一は窮兒の親方から推撰せられたものである。即ち窮兒の中で好方ありて、敏捷な者は眞の掏摸、又は窮兒の親方から撰擧されて眞の掏摸と化するので、かやうにして掏摸群中に入るのは實に彼等にとりて立身の一階級を昇りたものゝやうになつて居る

一掏摸の狀況　掏摸は幼きは十一二才から十五六才十八九才の者が多く皆親方に屬して日々其敎授を取げて使役さるゝものである。下等の掏摸は其衣食住皆親方が支給するので、其稼の割前は更に親方から與へられる、又たとひ獲物はなくとも衣食に離るゝをはないので、小使錢まで與へられるといふことである。中等以上となると、衣食住は自分持で之から以上になると親方の手を離れて獨立し、舊友である窮兒の中から役に立つ者を撰て自分の手下を拵へ業を擴張するのである。滊車中の稼又は田舍人をだまして金をとるなどは親方連中連合の仕事で、手下にはとてもなし得ない。かやうな親方になつた掏摸は實に窮兒が最極の立身出世といふべきである。

掏摸の親方と親方との間、及仲間の間には何れも聯絡があり、又嚴密な規則があつて、子分たるものはぜひ其規則に服從しなければならず、又たとひ捕へられても決して其親方との關係や、仲間の

事を白狀するものではない。

掏摸は大抵十八九才までに、少くとも一二度は必ず監獄に投ぜらるゝが、此時にさすがに內心に自分の業を厭ふ心が起る。さりとて幼兒からした事は悉く惡事で、見聞皆正業でなかつたから正業を思ふ念は少しも念頭に浮ばない。其上に獄中で强窃盗又は詐僞など、種々の惡事を聞いて惡念が增長し出獄してからは、前に上越す惡人となり、終身獄屋住居をするものも隨分多い。

一立ん坊　窮兒中の不敏な者、愚かな者は奸智を要する掏摸窃盗のやうな仕事には到底不適當であるから、幸にも掏摸の親方又は舊知人の撰拔を蒙らず、やはり相變らず窮兒として日を送るのである。けれども成長するほど人のあはれみを受ける事が少く、乞丐では生活ができない爲に、紙屑拾ひ、魚腸拾ひ立ん坊などの職業を見付て從事する、之等は別に人を害しないけれども、一朝病にかゝると必ず警察の手を經て公共の救助を受けなければならぬ。行旅病者として、年々養育院に收容さるゝ者の過半は此類である。

一カッパライ窃盗となる　前に述へた乞丐、屑拾ひ、小盗の三事を兼業するカッパライといふ一種の者は、研究に研究を加へて惡事年と共に增長し、巧になり遂には專ら窃盗を事とするに至るのである。そも〳〵彼等は幼稚の時からすこしも教育を受けず、只他の金品を奪掠する法を教授され又自ら練習して成長したものであるから、才智も專ら惡事に向て發達し、盗は惡であるといふ事さへも知らぬ。從て入獄しても。改悛の念は起らず、却て惡くなつて出るといふのが多い。

以上述べ來つた事情に由り、窮兒といふ者の結局は左のやうになる

一智ある者は掏摸强窃盗となり、監獄に入る。

一無智の者は立ん坊となり、行旅病者となる。

一不具廢疾の者は純粹の乞丐となり、行旅病者となる

あゝ、此通に窮兒は智ある者、智なき者いづれもかなしい局を結ぶものであります。之等は如何なる程度まで世を害し、人を毒して居りませうか。窮兒を放棄した結果はどれほどまでにおそろしいものでありませうか。かやうな者を世の中に現出させる原因は果して何處にありませうか。已に現出して居る以上は之をどうしなければなりますまいか。

かみなつき（十月）

せく生

晝夜平分たる御彼岸のすぎ去りてより、夜の次第に伸長するにつれて、晝はます〳〵短縮し、宇宙の光景は日を追ひて、只沈みに沈み行く程に、常盤山いろどり月もはや過ぎて、錦織りなす佐穂姫のひとり舞臺さへ何時しか幕も下りなむとす。垣根の朝顏、花盆の黃菊やう〳〵小く咲きて、一つ二つ葉がくれに見ゆるを、誰一人だに振り向きもさへせねば、其のはじめの事、いとゞ思ひ合せらるゝになむ。まして日の暮れて、松虫鈴虫の鳴きよわり、聲のはかなげなる、椽の下、壁の中など、疲れ〳〵てコロ〳〵とも言はぬ蟋蟀の聲に、こまかき雨バラ〳〵と音して、垣根の上薇へる芭蕉葉を叩くなど、老いたる人、憂もつ身の聞きも

せば　其の感果して如何ならむ。

平安朝の歌聖、貫之大人は咏ずらく

立田山にしき織りかく神無月
　時雨の雨をたてぬきにして

神無月かぎりとや思ふ紅葉ばの
　やむ時もなく夜さへにちる

ちはやぶる神無月こそ悲しけれ
　誰を戀ふとかつねにしぐるゝ

時雨れ時雨るゝ夜の晴間の月よ、十三夜の其れとしもおもはれぬなり。やがて吹く風冷かに、朝なゝにおく霜有明の月影に、雁金の聲まれなるいとすごし。

神無月の名のいはれ亦さまゝなり。

水戸義公光圀卿の御隨筆には雷のなき月ゆゑかみな月といふと記されしぞ動きなき說と思はる。

されど尙面白く尤もらしきものある中にて、最も古く理屈をつけし、例の鎌倉時代の淸輔朝臣は、

「十月は天下の諸神出雲國に行きてこゝ國には神なきが故に神無月といふを訛りていへり」といひて、俗人の耳をうなづかせたれば、人々大抵は此の傳說的の附會說を信じとせり。

尙十月は伊弉册尊の崩御ましましゝ月なれば神のなくなれる月といふ意味にて神無月といふと信する人もあり、又十月は神嘗祭をする月にて神嘗月をなまりたりと主張し、特にこじつけらしきは十といふは數の極みにてこれより上の數は只重ぬるのみなれば、即ち十は數皆月にて訛りてはかみな月となるなりといふ類は、只古人の想像の面白かりしを感ずるの外なかるべし。今神無月の外十月の異名の歌一つ二つ記しみん。

時雨月（定家卿）

ちりはてし木の葉の後のしくれ月
　冬のはしめに何をそめまし

拾月（顯昭法師）

秋の色のかはりはてぬる拾月かな
　松より外は殘る木もなし

初霜月（長明）

草も木もはつ霜月の朝ぼらけ
　なかめも白き人のをちかた

牧羊閑話

牧　羊

五月二十八日の朝、皇后陛下の御誕辰を祝ひ奉る時、五六才を上に四才位の子供四五人、

「やー、先生」！

と叫んで、僕の所へ、不意打突る樣に飛びかゝつて來た。

「先生、今日は旗日ですね」と一人が、言ふから

「何の旗日だ」！　と聞くと

「皇后樣の御生れになつた日です」といふと

「皇后樣と仰るのは」？と問ふと

「日本の天子樣の奥樣です」と答へる。尤も皇后樣は男でいらつしやるか女で居らつしやるかに付いても大分八釜しい議論があつたのであつたが、比較的先の答が一番正しかつた。そこで

「そんなら日本といふのは何處だ」？と聞くと、皆が一樣に

「分らない」と答へる。夫にも係らないで

「日本と幼稚園とは、何方が大きい」？と聞くと

「そりや日本の方は大きい」!!!　といふ

「そんなら學校とは？」と聞くと、一人は、

「學校の方は大きい」といふし、一人は「日本の方が大きい」と云ふし、中々決しない、そこで一歩進めて、

「東京とはどうだらう」？と聞いた所が之は疑ひなく決せられた

「そりや東京が大きいわ、ねーずーつとあつちの本郷からだもの」!!!

兒童教育の任にある人は、此無邪氣の言葉から何か見出され相である。

僕が何時か、英語の歌を歌つて居ると、今年四つになる福ちやんが走つて來て一寸耳を傾けて見て、

「伯父さん、それ　どこの歌なの」？

知らぬ顔で　夫を獨乙語で答へた所が　福ちやんまことに氣に入らぬ顔をして

「あら、いやだよ此伯父さん　酔ぱらひの樣なこと言つてるよ」!!!

五になる子でも酔ぱらひの言ふ言葉は、分らぬものと定めて居る。

五から六つ位の子供を集めて、加藤清正の虎狩りの話しを聞かせてやつた所が、如何にも尤もらしい顔をして感心して居たので、

「どーだ、加藤清正と桃太郎と、どつちが強いだらう」？

と問ふと、皆が言ひ合せた樣に

「加藤の方が強ひ」!!!

と答へたから

「夫でも桃太郎は　鬼を退治したではないか」？

と聞くと

「けども　鬼よりか虎の方が強いのだもの」!!!

この時分から　三段論法の推理式を應用して居るのが面白い。

來年四月、小學校に入る男の子が、しきりと石盤に繪をかいて居る。見た所、兩方から旗が出て居る所なのであつた。

「信ちやん、何を畫いて居る」?

すると信ちやんはひよいと顏を擧げて

「日英同盟なんです」

そこで僕は又、

「日英同盟ッて、何の事かね」?

信ちやん、澄したもので

「それはね、日本と英吉利とが、こんな風に旗を立てゝね、燈灯なんか、幾つもブラ下るんです」!!!

言葉だけ知つて、內容の無いことが、子供には有り勝なり。

秋の林

清涼なる空は、嚴格なる夏を送りて、○○秋陽漸く白く、軟風一陣滿目數十里、なべて鮮黃に飾られ褐と紫と紅とのくさ〳〵の點綴さへ加はりて、中に此處彼處と常綠樹の黑く聳ゆるあるのみ、此秋の支配に、蹈み止まりて抗爭しつゝ、雛菊、翠菊、鋸草などの咲き殘りたる、さては木苺の實りたる秋茱萸の殘りたる、藪萬兩のふさ〳〵したる、芒の長くサワ〳〵招くあり。

○風は蕭々として林中を通し、既に弛みし槲、木毛欅などをふるい、颯々として、胡桃も櫟も、松樅などの毬果をも拂ひ去る、林間、風靜に波穩なる池邊、小鴨のゆれ行くもの二つ三つ、鴻雁時に幽に中空を渡り、林禽の啾ふもの、既に去つて久

し。

何たる喧噪ぞ、驀然として林中に襲ひ來りたる吁是れ何たる何等の雜鬧ぞ、栗鼠は枝に武者振着き、老狐は奔竄し、兎は身を屈め耳を尖らし、憶病なる牝鹿は廣野を求め、牡鹿は近く茂みに姿を隱し、鳴、鴨、鴛鴦など葦間に遁げ匿くる、戛々の音は續き、囂々の吠は頻なり、其間時々鋭聲爆然として叢に轟く、げに總ての禽獸の安穩を攪亂するものは、狩獵なり。……其寢床より驚起して、兎は脫然として走り、彈丸は迸り、走狗は跳びかゝり、斯くて討ちとられたる禽獸は、皆獵夫の囊に投げ入れらる。暴き狩獵は尙暴れて、林の邊にて、鷸鴫の一群は飛び起ちて、砲聲は更に爆發し、又もや其半ダースは地に落ちぬ。此雜鬧の近づきしより、葦間を高く飛び上りて、池の鷸鴛鴦、鴨など命からゞ〳〵逃げ翔る。

喧噪は尙遙に續きて遂にやう〳〵止むや、忽にして、啄木鳥は再び蟲を求めて、丁々と樹を敲き始め、鶯、山雀、知更鳥、鶺鴒等羞しげに出で來る。

是に於てか、散り行く木の葉と、彈丸に仆れし禽獸とが、道獨り行く旅人に起さしめたる「死の感想」も、何時しか消えて、斯くまでも麗はしく秋の林を彩り給ひしその神は、げに「生命の神」なりといふ意識は、自から起らざるを得ざるなり

（まか生　譯）

學びの窓

●女子高等師範學校　來年四月文科理科技藝科に各二十五名の生徒を入學せしむる由志願者は來

月五日迄に各府縣廳へ履歴書及願書を差出すべしとなり　但し年齢は十七年以上二十二年未滿にして夫を有せざる者身体健全品行方正師範女子部高等女學校卒業以上

●女子大學の近況　同校には從來校内には家族の寮舎三棟と校外に二家族の寮舎二棟ありし所、今學期より樺山伯の好意によりて、同伯邸内に二家族の寮舎二棟を設け、樺山寮と名け、寺田勇吉氏の邸内に森村市左衛門氏の好意により三家族の寮舎一棟を建て、豐明寮と稱し、各七十餘名の生徒を收容し、之にて大凡全生徒の半數即ち四百名の生徒を收容することゝなり、自宅以外より通學する者止を得さる事情のもの、外、悉く入寮せしめ嚴重に監督保護することゝなしたる由。

●森村豐明會の美擧　森村市左衛門氏等の組織せらるゝ豐明會は日本女子大學校の旨趣を贊成せられ、今回金參萬圓を同校に寄附せられたる由にて、其書狀及目錄は左の如し。

謹啓時下愈々御清靜奉慶賀候陳者曩今我邦に於ける婦人の教育に關しては小生共聊か微見を有し居候處貴下多年誠意御盡瘁の功を博愛諸家の有力なる贊助とに依り近頃日本女子大學校の創設を見るに至りしは寔に邦家の爲め欣喜措能くはざる所に御座候此上は貴下御始め御指導宜しきを得て將來國民幸福の大本なる良妻賢母たるへき人材の貴校より續々輩出あらんことを千祈萬禱の至りに堪へず仍て此の美擧を贊し乍些少別紙目錄の通金參万圓貴校基本金中へ寄附致し度御受納あらば本懷の至に存候先は右まで得貴意度如此御座候敬具

明治三十五年九月廿二日　森村豐明會

會員　森村市左衛門　森村勇　大倉孫兵衛
村井保固　新井領一郎　廣瀨實榮
永井義三郎　諸鳥小彌太

日本女子大學校長成瀨仁藏殿

目錄

一金參万圓也

右者日本女子大學校創設之旨意を贊し基本金之中へ寄附致候也

明治三十五年九月廿二日　森村豐明會

北海道短信

●奥村五百子女史の來道　帝國婦人會の會員募

集のため八月中來道せられ、各地に於て演說を催されぬ、到處聽集者多く殊に史は老体なるにかゝはらず尙壯々快辨を以てせられたれば眞に懦夫をして起たしむるの感ありき、

◎文部視學官の來道　隈本文部視學官は七月中來道せられ、各地教育の狀況を視察せられたり。

●九月の北海天地　蟬聲音を絕ちて三伏の炎暑何時しか去り、玉露團々叢中僅に昆虫の悲曲を奏するのみ、楷前の梧桐秋聲を報するも亦近きにあらん乎

短信（九月十八日）

高知より

●久しく旅行中にて、通信相怠り申し候。

●いづくも同じ事ながら、當地も夏期中は講習會大流行にて、實業女學校の音樂、中村女藝傳習所の家政、其他高等女學校、勝賀瀨裁縫傳習所等、處々に割烹家政などの講習行はれたりしが、講師生徒共何れも熱心にして、餘程好果を得たるやう承り候。

●勝賀瀨裁縫傳習所は、今九月より學校組織に定め、勝賀瀨裁縫女學校と稱し、又棚橋ふで、乙武うたの二女子により新に私立土佐裁縫女學校と稱するもの設立せられ候。

●本縣女教員は年々缺乏を告ぐるにより、縣下にては高等女學校に一ヶ年の講習科を置き、同校本科卒業生を入學せしめて之を採用し來りしが、尙之にても不足を充すに足らざるを以て、今回縣師範校内の小學正教員講習科男子部生徒の近々卒業するを幸ひ、女子の生徒を入學せしむることに決定いたし居り候。

●縣下小學女教員は來年一月より服制を一定、何れも袴を着することに内定いたし居り候。

新刊紹介

▲ろびんそんくるーそー。その一。鈴木虎市郎編

この本の由來をいつて見ると、先づ日本での無類の書物だといつてよい。即高等師範學校附屬小學校尋常四年生が拵らへたのである。修身としてロビンソンの話を教はつたのを同級の生徒が作文にした夫を編んで一册としたので、挾畫も同じく生徒ので、夫を少年文學として立派な体裁で出版されたのである、中々面白い考と、いつてこい編者の言によると文は兒童の意を其儘になし置かんと思ひ、極めて不都合なき場合の外は凡て手を入れず云々との事であるが、どうして中々立派なもので、運さんそこのけだ。先づ大体の由來は如此で頗る面白いがさてこれを出版して讀物にするのは、果してどうであらうか、然しこれはこいで言ふべき限りでないから止さう。（定價十五錢　本郷森川町育成會發行）

▲虫の譜　毎月一回　發行所　育成會

これは學生倶樂部の第三卷第六號のことで、珍袖形の頗る的ハイカラ本の体裁である。表紙もさし畫も中々立派に出來て居る野頭時文欄のブッククームは當時學生の一讀すべきもの

▲繪はがき倶樂部　月一回　（定價一册十二錢）

繪はがき大の册子で、倶樂部の目的はつまり部員相寄りて、面白い趣味ある繪はがきを案出しようといふので、號必らず四枚の繪はがきがついて居る、餘程奇麗だ其他には小品文、和歌、詩、俳句等を載せて居る。（一ヶ月分十錢　三ヶ月前納で申し込むこと）

▲女子新聞　京橋區鈴木町十一番地　女子新聞社

毎週一回の發行で、紙質も奇麗で、記事も豐實で論説や小説や雜報等見るべきものが甚た多い。殊に料理や禮節のことが詳しい（定價一ヶ月十錢）

會報

●幹事會　九月廿五日女子高等師範學校附屬幼稚園に於て開會來十月の常會の事に付議す。出席者は中村主幹大島、和田、雨森、佐々、松村、野口、林、下田幹事外に東基吉氏の十氏なりき。

入會

奈良縣高等女學校　平野蝶
廣島縣師範學校　瀧山幸
東京麹町區飯田町四丁目一六　江原その
女子高等師範學校寄宿舍　奈良あい
同　益田一枝
廣島縣安藝郡吳港三津田小學校　城戸良龍
鹿兒島縣鹿兒島市鹿兒島幼稚園　寺内頼
神戸市中山手通五丁目十二番地　池田かよ

轉居

高知縣吾川郡名野川村猿橋品原方へ　吉田たみ
牛込區矢來町四番地十號へ　關口たけよ
京都疏水慶流橋南詰西側へ　八坂さだ
大坂豊能郡池田町上池田法圓寺裏門内　若尾久壽
青木仁作方へ　中原ふく
信濃國上田高等女學校へ　菱沼こなつ
東京青山南町二の六九へ　市原壽美
長崎縣佐世保市福田町一一三〇第一へ　勝田暢子
香川縣丸亀市字土居へ　大桑いよ

會費領收

自七月二十四日　至九月二十五日

一金八十錢　自三十四年十二月　至三十五年七月　沼村あい
一金一圓二十錢　自三十四年十二月　至三十五年四月　亀谷なる
一金一圓五十錢　自三十五年三月　至三十六年六月　蒲生さと
一金一圓二十錢　自三十五年八月　至三十七年八月　高木みつ
一金四十錢　自三十六年一月　至三十六年二月　武藤うめ
一金六十錢　自三十五年七月　至三十七年二月　亀岡つぎ
一金一圓五十錢　自三十五年十二月　至三十六年一月　瀧山幸
一金五十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　今井つな
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年二月　御園生よそ
一金六十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　藤村いと
一金五十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　小々高操
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　寺島とみ
一金五十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　松村さだ
一金二圓十五錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　野村ぎん
一金六十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　小島政吉
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　尾崎勝己
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　相馬宗孝
一金五十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　御厨守忠
一金六十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　武井綱枝
一金五十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　鈴木れい
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　豊田せい
一金六十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　平岩繁治
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　馬場さら
一金九十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　飯野ふみ
一金一圓二十錢　自三十五年十一月　至三十六年一月　海野きみの
一金二圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　阿部つる
一金一圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　淺田しづ
一金二圓　自三十五年十一月　至三十六年一月　坂野すゞ

一金一圓	田中梅	自三十五年五月
一金八十錢	久保ます	至三十六年二月
一金一圓	安達けい	自三十五年五月
一金四十錢	坂元あき	至三十六年二月
一金四十錢	平塚貞	自三十五年五月
一金四十錢	重田ふぢ	至三十六年二月
一金四十錢	小島はま	自三十五年五月
一金六十錢	野秋きよ	至三十六年二月
一金一圓	松岡さち	自三十五年五月
一金六十錢	井上半介	至三十六年二月
一金一圓二十錢	福本とみ	自三十五年五月
一金一圓	越智きみよ	至三十六年二月
一金一圓	山崎なみ	自三十五年五月
一金一圓	吉田たみ	至三十六年二月
一金一圓	柳川松子	自三十五年五月
一金五十錢	儀俄ふみ	至三十六年一月
一金三十錢	小野田みほ	自三十五年五月
一金六十錢	滝井はつ	至三十六年二月
一金六十錢	中島行徳	自三十五年五月
一金二圓	淺野てふ	至三十六年四月
一金六十錢	田中とし	自三十五年五月
一金二十錢	石島ひろ	至三十六年二月
一金五十錢	山田かめ	自三十五年五月
一金六十錢	小澤さき	至三十六年二月
一金六十錢	伊庭なほ	自三十五年五月
一金六十錢	安藤さつ	至三十六年二月
一金六十錢	小田しの	自三十五年五月
一金一圓	廣瀬たみ	至三十六年四月
一金一圓	勝田暢子	自三十五年五月
一金九十錢	野秋きよ	至三十六年二月
一金一圓	松岡さち	自三十五年五月
一金一圓	井上半介	至三十六年二月
一金五十錢	福本とみ	自三十五年五月
一金一圓五十錢	越智きみよ	至三十六年二月
一金一圓二十錢	山崎なみ	自三十五年五月
一金一圓	吉田たみ	至三十六年二月
一金六十錢	柳川松子	自三十五年五月
一金一圓二十錢	儀俄ふみ	至三十六年一月
一金一圓	小野田みほ	自三十五年五月
一金五十錢	滝井はつ	至三十六年二月
一金二十錢	中島行徳	自三十五年五月
一金二十錢	淺野てふ	至三十六年四月
一金二十錢	八田とし	自三十五年五月
一金一圓	石島ひろ	至三十六年二月
一金一圓	山田かめ	自三十五年五月
一金一圓	小澤さき	至三十六年二月
一金一圓	伊庭なほ	自三十五年五月
一金一圓	安藤さつ	至三十六年二月
一金一圓	小田しの	自三十五年五月
一金一圓	廣瀬たみ	至三十六年四月
一金一圓	勝田暢子	自三十五年五月
一金一圓	丸井まつ	至三十六年二月
一金一圓	江原その	自三十五年五月
一金一圓	吉村はま	至三十六年二月
一金一圓	寺尾きく	自三十五年五月
一金一圓	寺内顕	至三十六年二月
一金一圓	槻尾かなる	自三十五年五月
一金一圓	太田ため	至三十六年二月
一金一圓	寺島さく	自三十五年五月
一金一圓	山田せん	至三十六年二月
一金一圓	富田八千代	自三十五年五月
一金一圓	平野みよ	至三十六年二月

小柳ゆき	一金四十錢	自三十五年九月至三十二年十月
赤江よれ	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
小林ふゝ	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
宮崎もと	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
高木なみ	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
安東てい	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
村井あい	一金十錢	三十五年九月
木村さら	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
相川みれ	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
根來まさ	一金五十錢	自三十五年八月至三十五年十二月
渡邊すみ	一金二十錢	自三十五年九月至三十五年八月
藤岡さき	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
內田たれ	一金五十錢	自三十五年八月至三十五年九月
岩田ゆき	一金二十錢	自三十五年八月至三十五年九月
奈良あい	一金十錢	三十五年九月
益田一枝	一金十錢	自三十五年九月至同三十五年三月
山根さし	一金七十錢	
池田かよ	一金一圓	自三十五年九月至三十六年六月
吉澤幸	一金一圓	自三十五年八月至三十五年五月
北村きた	一金十錢	三十五年八月
菱沼小夏	一金一圓	自三十五年九月至三十六年十二月
安達かつ	一金五十錢	自三十五年十二月至三十六年十二月
近藤つるよ	一金五十錢	自三十五年十二月至三十六年二月
加納貞子	一金三十錢	自三十五年九月至三十五年七月
鳥居飯三郎	一金五十錢	自三十五年八月至三十五年四月
下瀨たつの	一金一圓	自三十五年十一月至三十六年四月
田中織衛	一金六十錢	自三十五年十一月至三十六年三月
大平みち	一金一圓七十錢	自三十五年十二月至三十六年四月
宮本こすえ	一金六十錢	自三十五年十二月至三十五年七月

謹告

本誌第一卷第四、五、六、七、八、九、十、十一、十二號　第二卷第二、三、四、五、六、七、八　九號各若干づゝ殘部之有り候に付き御希望の方は本會宛至急御申し込み下されたく候。但し一冊に付金拾錢づゝの割にて御前納のこと。

會告

一、會員御轉居の節は、其都度早速御報知下されたく候。然らざれば、双方餘計の手數を煩はすこと、間々之あるべく候。

一、會費相切れ候節は、早速御納め下され度く候。御延引の方へは、失禮とは存じ候へども、已むなく御催促申し上ぐべく候。但し、必らず女子高等師範學校附屬幼稚園内フレベール會宛にて御納め下され度候。

一、入會御希望の方は會費（一ヶ月十錢）前納と共に直接本會へ御申し込み下されて宜しく候

(婦人と子どもの第二卷第拾號)
明治三十五年十月五日發行(毎月一回五日發行)

明治三十四年二月六日内務省許可
明治三十四年一月廿八日第三種郵便物認可

新刊廣告

唱歌教科書

近來唱歌の流行普及に伴ひ、之が用書の發行さるゝもの夥しと雖も、多くは、零細なる流行節的歌曲に非んば、雜駁なる唱歌臚列集にして秩序系統なきが如し、教科書と成すべきものの殆んど無きが如し、本篇は全く、これら先ち、全國の專門家より、當に、其編纂の書と攜を、其に、先づ、其編纂に當り、今各地に於ける唱歌普及上の狀況及意見等を求め集め、之を統一して以て其編輯上の方針を立て、次に之に叶ふべき歌詞を募集して得たる百數曲の中に就き、在京知名の音樂及文學の大家が綿密に撰擇し、なほ曲毎に其自然の樂趣を、最適當の音域、音速度を、附記し、更らに其程度及季節、調子等を定め、其順序に從ひ、最も系統正しく、之を排列したるものなれば、該科の教科書として最適切なる良書なり

全壹冊 郵稅一冊に就き金四錢

	教師用	生徒用
第一卷	定價金三十錢	定價金四拾五錢
第二卷	定價金三十錢	定價金六拾錢
第三卷	定價金三十錢	定價金六拾錢
第四卷	定價金三十錢	定價金六拾錢
全四冊	定價金一圓	定價金四拾五錢
第一卷	定價金十五錢	定價金三十錢
第二卷	定價金十五錢	定價金三十錢
第三卷	定價金十五錢	定價金三十錢
第四卷	定價金十八錢	定價金三十錢
全四冊	定價金一圓	定價金四拾五錢

吉田信太編

◉舞方

全壹冊 郵稅一冊 定價金四拾五錢 郵稅金六錢

本書は女子高等師範學校其他の學校に於て實施せらるゝ舞蹈の方法及樂譜を記載せし者也

山田春耕編

◉幼稚園唱歌遊戲法

全一冊 郵稅金六錢 定價金貳拾五錢

本書は朝道なる山田春耕先生が親に幼稚園唱歌の實驗家なる山田春耕先生が親に幼稚園唱歌の歌詞に附する適當なる趣味多き遊戲法を以てし何人にも解し易き樣說明せられたるものなり

音樂書院編

◉國歌集

第一編 郵稅金四錢 定價金拾貳錢 第二編近刊

本書は國民教育の一資料となさんが爲めに編輯したるものにして其第一編は條約締盟一等國の國歌を載せ各國語を其儘樂譜に附し尚外國語に通ぜざる者の爲に我が假字を以て各國語の發音をも併記したるものなり

◉洋琴

金參百圓以上 各種 貳千圓迄

鈴木製 金五圓以上五拾圓迄 各種 舶來品 八圓以上百五拾圓迄 各種

◉ヴァイオリン

◉樂隊用樂器

大太鼓金貳拾圓以上小太鼓八圓中以上シンバル金四圓以上其他バス、バリトン、テナー、アルト、コルネット、トロンボン等金貳拾圓以上百六拾圓迄

◉鼓隊用樂器

太鼓金拾圓以上 横笛金壹圓以上 ○學校用一組拾三圓

◉手風琴

金二圓五拾錢以上參十圓迄 各種

◉山葉風琴

保險附 定價金十六圓五十錢以上 貳百圓迄

右の外兩用風琴、吹風琴、ハーモニカ、フラジョーレット其他各樂器並に和洋音樂書各音樂附屬品各種

◉ピアノ、オルガン調律修繕

郵券二錢 御送附

目錄進呈

東京市竹川橋三十番地

共益商社樂器店

(電信略號ヨキ)
電話新橋五百廿九番